

研究紀要

14

2024.3

目次

■寄稿 資料紹介

「万日記」にみる文久三年奥州中村藩江戸警備の在郷給人の動向

水久保克英 …… 1

■奥州中村藩主・相馬家所用と考えられる甲冑－栗色塗縦矧二枚胴具足

二上 文彦 …… 14

■『瞽女口説地震の身の上』と福島県相双地方への瞽女の遊芸

二本松文雄 …… 27

「万日記」にみる文久三年奥州中村藩江戸警備の在郷給人の動向

水久保 克英

はじめに

文久三年（一八六三）、中村（相馬市中村）に帰城していた奥州中村藩十二代藩主相馬充胤が、幕府から急遽「御府内取締り」に任命されることとなり、出府した。その際、多数繰出しとなり、在村の在郷給人郷士も動員され、出府している。

「万日記」^{よろづにづき}は、出府した在郷給人の一人、標葉郡南標葉郷両竹村（現在の福島県双葉郡双葉町・浪江町）の田代鉄次郎が記録した日記（横長帳・表紙共三〇丁）である。出発前の文久三年三月十五日から八月四日帰郷、同七日小高妙見社参詣までの約五か月分をほぼ毎日書きつづっている。

本稿では、その全文を時系列で項目ごとに要約し、表形式で紹介する。なお、本史料全文の解説文は『近世文書 第九集^{*1}』に所収、また、在郷給人郷士の江戸警備の様子について、拙稿「文久三年の奥州中村藩江戸警備と在郷給人郷士」^{*2}で紹介している。

（一）文久三年当時の概況

約十年前、嘉永六年（一八五三）ペリー来航以降、幕府主導の下、開国が進んだ。その一方、長州藩・薩摩藩などを中心に尊皇攘夷が叫ばれ、全国的に緊迫した状況にあった。文久二年には、水戸浪士が老中安藤信正を襲撃した「坂下門外の変」や薩摩藩士がイギリス人を殺

害した「生麦事件」が起きるなど、尊皇攘夷が活発化する最中、幕府による公武一和策が採られ、その一環として翌三年十四代将軍徳川家茂の上洛が行われた。それに伴い、充胤に「御府内取締り」が任命されている。

（二）奥州中村藩江戸警備の概況

ここでは、文久三年から元治元年（一八六四）江戸および京都警備を記述した「京江戸勤番雑記写^{*3}」から概況を述べてみる。

文久三年三月、幕府により「不時（思いがけない時、臨時）」に出府が命ぜられた充胤は二月二十六日出立し、四月三日到着する。今回の任務に選定された在郷給人郷士たちは、担当する役人とともに三月二十一日出立し、二十七日到着していた。充胤は四月八日に江戸城に呼び出され、酒井繁之丞（忠篤 羽州庄内）・大久保加賀守（忠礼 相州小田原）・松平右京亮（大河内輝声 上州高崎）・阿部播磨守（正耆 奥州白河）の四大名^{*4}とともに「御府内取締り」が命ぜられた。なお、「万日記」では四月五日とする〔No.018〕。その目的は、品川沖にイギリス艦隊が来航することから、市中およびまわりが動搖し、それに乘じ悪徒が徘徊する恐れがあるのを抑えるためにあつた。とくに浪士の取締りにある。

早速、市中見廻りが毎昼夜一回ずつ、相馬家は江戸城の南西部、青山・四谷方面を担当した。出府した在郷給人郷士は百日詰で、三月出

府の「急発一番手」が一〇五人、七月出府の「急発一番手」が七四人であった。ただし、三番手は経費節減のため中止となり、二番手がそのまま行い、十二月以降の将軍家茂上洛に伴う京都警備にも随行した。「万日記」の田代鉄次郎は急発一番手に属する。

「万日記」にみる江戸警備の内容

「万日記」を内容に合わせ分類してみると、A出府、B市中廻、C給付、D詰合、E稽古、F外出、G食事、H藩主、I祈祷、J情報・事件、K書状、L火事、Mその他、N帰郷、O出立、P到着、の一六項目となる。ここでは、それぞれの項目ごとに紹介する。

A 出府（10件）文久三年三月十五日、急発に選定されていた面々に支度するよう達しがあった〔No.001〕。出府に掛かる費用として、合力金二両一分、御扱金一両、路用金一分一朱七五文、下非常金半分御返し銭三貫二三六文、本馬一疋につき二分三一〇文、さらに荷物用の荷本馬四人に一疋与えられた〔No.002〕。

三月二十二日出立するが、その道筋は、次のとおりである。

二十二日両竹村→新山→熊ノ町→富岡→木戸（小高郷と合流）→四ツ倉（泊）、二十三日四ツ倉→植田（昼）→足洗（泊）、二十四日足洗→孫（昼）→石神（泊）、二十五日石神→小畠（昼、北郷方合流）→稻吉（泊）、二十六日稻吉→松戸（昼）→千住（八つ頃）休み→（江戸道中通過）→外桜田上屋敷。荷物は千住から川を通り、数寄屋岸を経て屋舗（外桜田）、二十七日到着。

太平洋沿岸の東街道（浜街道）を通り、水戸から水戸街道、松戸・千住を経て、江戸の外桜田の相馬家上屋敷（千代田区霞ヶ関一丁目）へ入る五日間の旅であった。翌二十七日、麻布の中屋敷（港区六本木

二丁目）裏門で「着揃い」を行う。二十九日には、足軽七〇人到着した〔No.003～008・010〕。

住居は、上屋敷の奥座敷で十畳間へ八人くらいの割合であった。賄いは一日白米五合、汁・香物、薪は自分の持分入用より、膳・椀は支給（代金渡し）、鍋・羽釜・飯入の類、夫丸（使用人）は貸出し〔No.008〕。屋敷内には、侍・足軽・小人・夫丸四五〇人余となつた〔No.010〕。

B 市中廻（26件）一回の在郷給人郷士の人数は一八、九人ずつ出勤し〔No.020〕、昼の五つ半（午前九時頃）支度、四つ時（午前十時）揃い〔No.022〕。勤めは、在郷給人郷士九六人で六八人勤めとする〔No.023〕。行列の配置〔No.024〕は以下の順である。

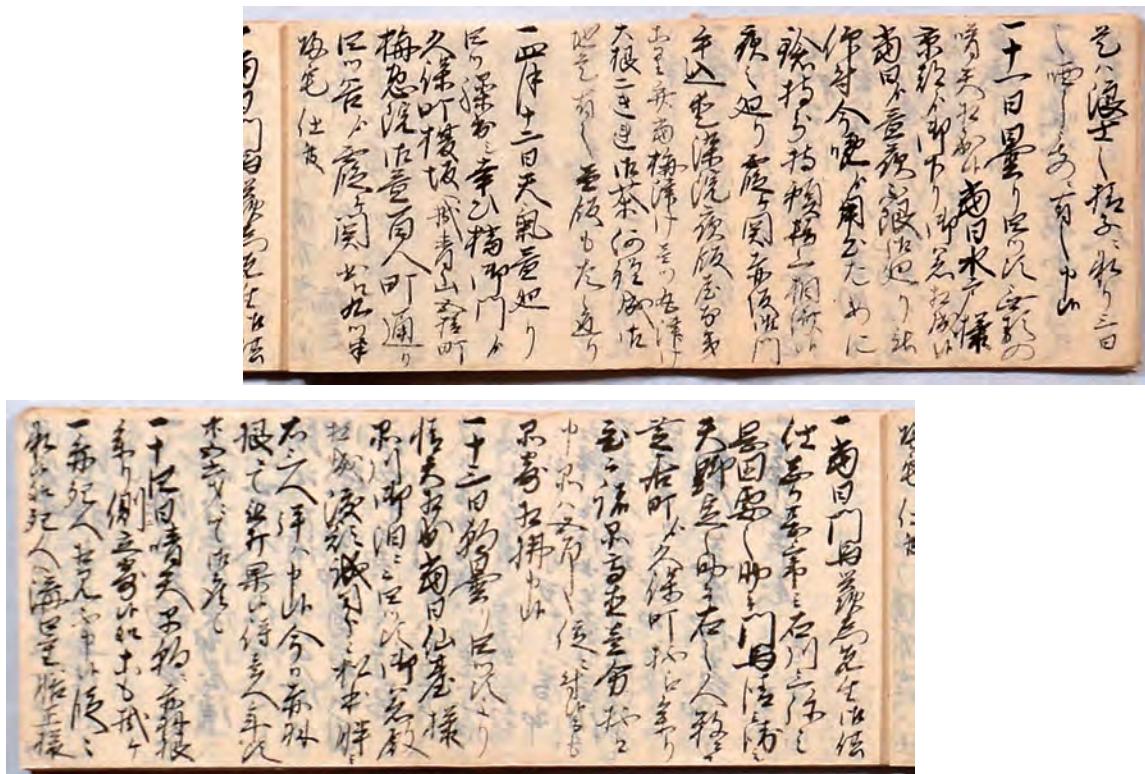
一組人数一二〇人くらい、先足軽二〇人一中目付一人（若頭付添）一二列遠士二〇人（一人ずつ鎧持付）一中目付（若頭付添）一二列給人一八人一蓑持六人一八丁堀六人一小人蠟燭持。

見廻り場所は、昼は四月九日からで三回〔No.025・032・144〕、夜は四月十一日からで、同じく三回〔No.031・148・155〕変更されている。昼は、一二回目が江戸城の南西部、三回目が北部。夜は、一二回目が北部、三回目が北西部となる。在郷給人郷士の持参品は陣笠と二尺五寸（約八二・五センチメートル）の棒、割羽織に小袴、鎧鉢巻も着用した〔No.026・027〕。四月十一日から鎧持を願い出て許される〔No.030〕。

夜の見廻りには夜食が出たが、あまりにも粗末なので、代金か米で支給となる〔No.059〕。

方法も途中で見直され、これまで一緒に廻っていたが、そのときだけ静まるのみだったのと、二組に分け、二丁（約二二八メートル）ほど離れて廻ることとなつた〔No.110〕。

見廻りを始めて五日後の四月十四日、十五日と本所三笠町（墨田区）



「万日記」文久3年4月10日～14日の部分 (No.29～36)
4月11日に夜、12日に昼の見廻り場所が各々記されている。

の小笠原家屋敷で浪士五〇〇人立てこもりが起きる。御府内取締り五大名総出で繰出し、相馬家は逃亡先の品川での警固と屋敷北方詰となる。鎧を持ち具足を着したが、一斉に攻め込んだ時は本陣控えとなつたので戦わずに終わった〔No.037～040・042〕。

C 納付 (6件) 在府中、藩から扶持や手当のほか酒〔No.043・151〕や薬〔No.084〕が給付された。特に七月二日の酒の給付に際し暴飲暴食が過ぎ、医師から「以ての外」と注意を受ける〔No.151〕。

D 詰合 (28件) 在府中、いろいろなことが起きる。かくらん病(暑氣あたり)になる者〔No.069・079〕、死去する者〔No.054・060・145〕、欠落する奉公人〔No.154〕、筆者鉄次郎も眼病となり難儀している〔No.109〕。また、仲間の石川三弥が病気に掛かり帰郷することとなつた〔No.123〕。このほか、仲間内での喧嘩〔No.055〕、火事見物で屋根に上つてお咎めを受けたこと〔No.120・121〕など生活の様子が窺われる。

E 稽古 (19件) 四月二十九日から見廻り日以外か半日交替で鎧・太刀の稽古を行なう〔No.056〕。また、七月三日から鉄砲の稽古も行なう〔No.152〕。他藩からも稽古に来ており、とくに白河藩士(阿部家)がよく来ていている〔No.073・118・129・139・176〕。このほか、西国を武者修行してきた門馬運平と三島重次の二人が鎧術披露を行つている〔No.091〕。

F 外出 (25件) 四月朔日から暇願いを出し、よく外出している〔No.013〕。主に洗湯や外食のためで、久保町(港区)で洗湯のあと、どじょう鍋〔No.015〕を食べに、また上野(台東区)方面に、猪や鹿肉を食べる「けだもの屋」に行き〔No.094〕、日本橋本町(中央区)でうどんやそつめ

んを食べている〔No.095〕。

神社仏閣や名所の見物にも出かけ、王子稻荷・飛鳥山（北区）〔No.078〕、高輪（港区）・品川（品川区）〔No.081〕、浅草（台東区）〔No.089〕、神田明神（千代田区）・上野（台東区）〔No.094〕、深川（江東区）〔No.096〕、金比羅（港区虎ノ門）〔No.116〕、赤羽根水天宮（港区）〔No.157〕、日蔭町（港区）〔No.051・160〕、芝（港区）の神明前〔No.051〕・増上寺〔No.171〕、神田明神で相撲見物〔No.138〕、など江戸を隈なく廻っている。

G 食事（7件）伊勢屋という料理屋か、酒や肴を注文し屋敷内で食している〔No.011・048・050・092〕。

H 藩主（3件）藩主相馬充胤の行動についてはあまり触れられておらず、出府〔No.014〕と登城〔No.018〕、そして、四月十五日本所屋敷浪士取締りの日、麻布中屋敷の妙見社に家臣の無事を祈り二度参詣したという記述がみられる〔No.041〕。

I 祈祷（7件）藩主が中村在住のとき中村妙見社で祈祷した御守を頂戴したこと〔No.017〕。鉄次郎自身も麻布の妙見社に参詣している〔No.049・087・134・150〕。四月十四日の本所屋敷の件があつて別当麻布不動院での祈祷と御守の下賜がなされた〔No.047〕。また、屋敷内で難病が多くみられたことから祈祷も行われた〔No.150〕。

J 情報・事件（13件）江戸でのいろいろな情報や事件についての記述がある。仙台藩伊達家の品川宿泊〔No.034〕、浪士取締りと江戸での殺人事件や喧嘩〔No.028・029・035・036・067・090・140〕、井伊家異国船打ち払い準備〔No.064〕、役人の不正〔No.071〕、火薬爆発事故〔No.113〕など

である。そして、將軍家茂が京都から江戸城帰着における江戸市中の混乱ぶりも書かれている〔No.124・125〕。

K 書状（4件）鉄次郎は、四回在所（領内）へ手紙を送っている〔No.058・080・088・100〕。

L 火事（8件）主に、六月三日、江戸城西の丸まで焼失した江戸大火の記述がみられる。火が外桜田上屋敷に近づいており、非常時の様子が詳細に書かれている〔No.101・106〕。このほかにも、江戸および辺の火事の記述がある〔No.046・149〕。

M その他（12件）節句祝〔No.063〕。地震〔No.130〕。鉄砲手入料受取り〔No.075〕。京都や在所の情勢〔No.141・143〕。味噌の仕送り〔No.165〕。盆見舞〔No.170〕。二百十日〔No.175〕。詰合中、天候のみで記載のないものが四日ある〔No.052・111・137・147〕。

N 帰郷（16件）

幕府には内緒で一〇〇日以前に一部帰郷させることとなつた。六月十日選定〔No.115・117〕、七月十一日から出立している〔No.158・163・166・167・172〕。このほか、病気で帰郷した者もいた〔No.126・127・174〕。そして百日詰が終わり、七月二十五日、鉄次郎も帰郷することとなり、その準備に追われた〔No.181・183・184〕。

O 出立（10件）七月二十七日出立。ほぼ同じ道のりであるが七日間掛かり、行きより二日多かった。途中、勿来関が通れず海岸沿いで国境を越えた〔No.185・194〕。

七月二十七日、朝五つ時（午前八時頃）出立→松戸（昼）→我孫子（泊）、二十八日我孫子→牛久（昼）→土浦（泊）、二十九日土浦→片倉（昼）→水戸（泊）、晦日水戸→森山（昼）→石町（泊）、八月朔日石町→神岡（昼・泊）、二日神岡→大津→平（泊）、三日平→広野（昼・泊）、四日広野→富岡（昼）→熊ノ町→五つ頃（午後八時頃）帰宅

P 到着（7件） 無事到着した鉄次郎は八月五日と六日休み、七日挨拶回りと小高妙見社参詣に行き（No.195～200）、次の言葉で締めくくつている（No.201）。

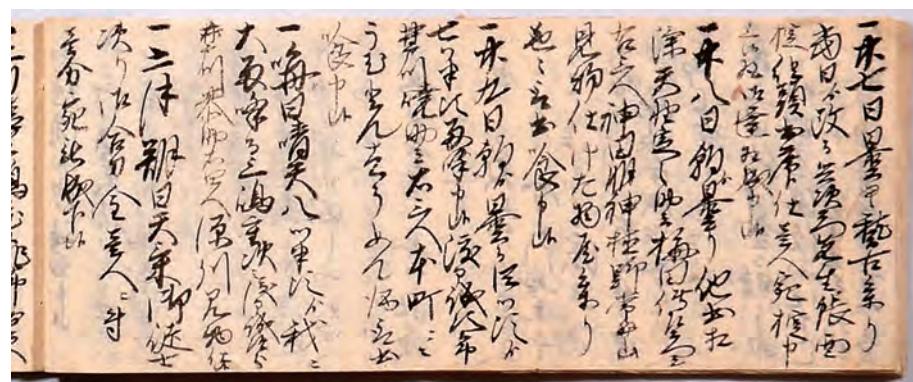
「急発詰合一統、無難にて大慶至極に存じ奉り候」

まとめにかえて

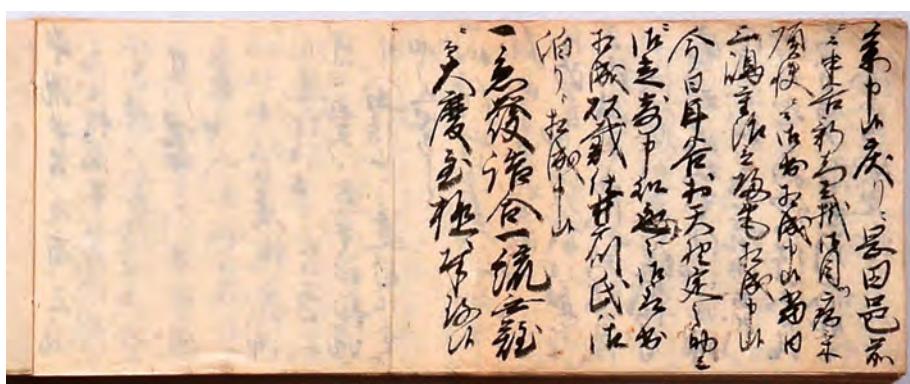
今回、「万日記」において、その事項に合わせ分類してみた。幕末期、地方から出府した武士たちにとって、いろいろ見聞することがあり、非常に関心を持って滞在していたことがわかる。その内容の豊富さはまだ多く、詳細については今後の課題としたい。

【註】

- 1 村田明家所蔵、『近世文書 第九集』（一九九八 野馬追の里歴史民俗資料館）所収 一～五七頁。
- 2 『福島県史学研究 第91号』 福島県史学会（二〇一三）
- 3 No.9～9 「文久三年三月～元治元年五月 京江戸勤番雜記写」（横長帳 佐藤愛子家所蔵文書）『原町市史5 近世 資料編III』 原町市（二〇〇七）所収。六六一～六八六頁
- 4 各大名については『日本史要覧』（二〇〇〇 山川出版社）に拠つた。



「万日記」文久3年5月27日～6月朔日の部分（No.93～97）
稽古や江戸見物など江戸での生活の一端が窺える。



「万日記」文久3年8月7日の部分（No.198～201）
最後に、無事役目を果たすことができた慶びが記されている。

No	月 日	天 候	事 項	分 類
001	3月15日		再度急発選定面々へ急発支度するよう達しがあった。	A 出府
002	3月18日		陣屋 22 日出発決まる。合力ほか給付。合力金 2 両 1 分、御扱金 1 両、路用金 1 分 1 朱 75 文、下非常金半分御返し銭 3 貫 136 文、本馬 1 歳につき金 2 分 310 文、荷本馬 4 人に 1 歳。	A 出府
003	3月22日	晴天	富沢利右衛門・井土川松多郎・井土川主土・渡部七兵衛・嶋清兵衛・愛沢庄右衛門・田代鉄次郎・新山へ参り、御酒頂戴し出立。熊ノ町・富岡それぞれまで見送りあり。中里勉・井土川恭助・渡部誠司郎、熊ノ町南ノ原で追い附く。木戸で小高・南標葉郷方と合流。四ツ倉泊り、旅籠 350 文。	A 出府
004	3月23日	晴天	明け七つ時出立。植田昼。足洗泊り。杉浦菊右衛門・北仁右衛門・大浦五藤左衛門・門馬兵次右衛門(御家中か)同道。	A 出府
005	3月24日	終日雨天	孫昼 100 文。石神泊り 350 文。	A 出府
006	3月25日	四つ頃より曇り、九つ頃より快晴	明け七つ時出立。小畠昼 100 文。北郷方追付く。稻吉泊り、旅籠 350 文。	A 出府
007	3月26日	晴天	途中、土屋様奥様御通り拝す。松戸昼 100 文。千住へ八つ頃参り。荷物、瀬川迄そこから船で数寄屋岸、翌 27 日五つ半ごろ屋鋪着。道中装束にて休み、屋鋪まで鎧持分、北・小高・南標葉 44、5 人、中頭衆 2 組にて引く。「誠勇々敷相見、江戸之道中何れも見物飛出候」	A 出府
008	3月27日	晴天	裏御門より着揃い。奥座敷割合 10 頃間へ 8 人位。御賄いは 1 日中白米 5 合割、汁に香物、薪は持分入用。膳椀、御上より渡し、代料にて差上げ。鍋・羽釜・飯入の類、夫丸は御貸し。	A 出府
009	3月28日	晴天	着いた夜より翌 1 日は一度、扶持 1 合 7 勺 4 才ずつ、酒・香物・汁の三類何時なり御屋鋪参る。「江戸中結構所ニ御座候」	A 出府
010	3月29日	晴天	足軽 70 人到着「何れも具足背負至極花々敷拝見申候」。屋鋪内に侍・足軽・小人・夫丸 450 人余住居。屋鋪内見物、侍長屋西方より北方、夫丸長屋南方より東方、御馬屋東方、鎧稽古場南方、大蔵北東方、表御門西方、裏門北方。	A 出府
011	3月晦日	少々曇、四つ頃より晴天	伊勢屋より酒注文、誠司郎・恭助 3 人で呑む。	G 食事
012	4月朔日	朝より雨降る	一度扶持一人前 2 合ずつ御渡し。	C 納付
013			今日より他出御暇願い 25 人のうち 5 人ずつ、そのうち 1 人小頭付添。	F 外出
014	4月2日	明七つ頃より終日雨	御家中触、殿様松戸止宿、明 3 日麻布着。正四つ時頃麻布御門にて急発一統御目見、九つ時詰める。	H 藩主
015	4月3日	早天、曇り	久保町洗湯暇、中里勉・松本胖・小ノ田安之丞・天野定之助・田代鉄司郎 5 人本町へ参り、ぶだ鍋・どじょう鍋沢山、酒養生。	F 外出
016	4月4日	晴天	長塚村鹿次郎・小高郷大井村甚左衛門、夫丸召使当日替り、大川原村清次郎・浪江町佐多郎。	D 詰合
017			殿様、詰合家中・給人一統安全のため、中村妙見社二夜三日祈祷、銘々掛守 1 つ下され、郷々組頭が御礼。	I 祈祷
018	4月5日	終日雨天	諸家登城御付けらる。御当家、御用番松平豊前守へ留守居呼出、書付にて仰蒙らる。惣家中・給人屋鋪触あり。 御府内取締り・市中浪士取締り 15 万石羽州庄内 酒井繁之丞 11 万石相州小田原 大久保加賀守 10 万石奥州白川 阿部播磨守 8 万石上州高崎 松平右京亮 6 万石奥州中村 相馬大膳亮	H 藩主
019	4月6日	終日雨天	持参金、書記し印封、郷々大封、勘定奉行立合金子蔵へ入れる。持参金 3 両から 15 両くらい。	D 詰合
020	4月7日	終日大雨	諸郷組頭・中頭呼出達し、「御徒士次り(見廻りのことか)」の繰出し 18 人、19 人ずつ出勤するよう。	B 市中廻
021	4月8日	終日大曇り	貲物暇、井土川恭助・渡辺誠司郎・天野定之助・渡辺喜代季・半谷新右衛門、鎖鉢巻 500 文ずつ買う。	F 外出
022	4月9日	曇り	当日より御徒士次り 4、5 人ずつ。五つ半支度、四つ時揃い。	B 市中廻
023			96 人にて 68 人勤め、御合力は 68 人分。	B 市中廻

No	月 日	天 候	事 項	分 類
024			1組人数上下120人位、先足軽20人、2列遠士20人・1人ずつ鎗持付、2列給人18人、蓑持6人、八丁堀6人、小人蠍燭持、中目（中目付？）2人（足軽・遠士の間、遠士・給人の間、若頭1人ずつ付添）。	B 市中廻
025	4月9日	曇り	廻り場所、霞ヶ関・赤坂御門・青山参り、梅窓院（御昼）・百人町・四ツ谷御門、霞ヶ関参り、八つ頃帰宅。	B 市中廻
026			持参品、陣笠・2尺5寸棒、支度、割羽織小袴。	B 市中廻
027			御徒士次り、鎖鉢巻・小袴を用いる様達しあり。	B 市中廻
028	4月10日	晴天	浪士には公儀より扶持下さる面々もおり、浪士頭取もいた。そのうちでも乱妨する者は打果すよう達しあり。	J 情報・事件
029			9日晚、両国にて打果てられた者2人、浪士の様子、3日晒しもの。	J 情報・事件
030			水戸様京都より下り着く。当日より昼夜の廻り。今晚より鎗持願い済み。	B 市中廻
031	4月11日	曇り、四つ頃無類の晴天	夜の廻り、霞ヶ関・赤坂御門・牛込愛染院、夜飯屋なきより弁当、梅漬1つ、丸漬大根2きれ、御茶。	B 市中廻
032			昼夜廻り、四つ繰出し、幸御門・久保町榎坂・青山五十町・梅窓院（御昼）・百人町通り・四ツ谷・霞ヶ関出口、九つ半帰宅。	B 市中廻
033	4月12日	天気	門馬与次右衛門先生御供、志賀甚三郎・石川三弥・岡田要之助・門馬清兵衛・天野定之助、芝居町より久保町。諸品高値で、1分くらいの品も500文で買う。	F 外出
034			仙台様、品川泊り、四つ頃着殿、渡部誠司郎・松本胖と3人ばかりに申す。	J 情報・事件
035	4月13日	朝曇り、四つ頃より晴天	赤羽根、打果たされた侍1人、年頃25才。	J 情報・事件
036			早朝、赤羽根参り、一円こも掛けされ死人見えず。死人溝口主膳正家来、打った者浪士躰、詳細不明。	J 情報・事件
037			八つ頃大急触、本所三笠町小笠原屋舗へ浪士500人余住居、頭取召捕るよう、当家、山岡鉄多郎召し捕り。	B 市中廻
038			品川のほう1組指出し130人、四番手まで繰出し。	B 市中廻
039	4月14日	晴天	本所小笠原押寄せ方、 酒井繁之丞：上下500人余、大手の門。 大久保加賀守：上下500人余、東の方固め、白鉢巻。 阿部播磨守：上下400人余、搦手門。 松平右京亮：手替え上（ママ）にて300人余、南固め。 相馬大膳亮：4月14日暮七つ詰、一番手二番手130人、夜品川へ。三番手15日朝六つ半時詰、四番手四つ時品川替り詰。北方固め、鎗持・具足着す。	B 市中廻
040	4月15日	晴天	本所へ押寄せ2500人余、何れも着込み・具足着、両門固めより押入るが、一先ず引取り本陣控え、輩の内浪士11人頭取者切腹、7人縄付け、備触あり、九つ頃諸備引取り、品川詰合16日朝六つ半時帰宅。「偏神仏の御力と奉感候」	B 市中廻
041			殿様大気に御心痛になり、家来無難のため、1日2度妙見社参詣。	H 藩主
042	4月16日	天気	品川詰合、六つ時帰宅。	B 市中廻
043	4月17日	晴天	朝五つ時、中頭より達し、市中廻り当番の外、麻布出殿、四つ時揃い、九つ時御目見。御広間にて「相実ニ難有儀、御意蒙、泪流之程」、一同へ酒3合ずつ下され、殊に煎染迫（？）頂戴。	C 納付
044	4月18日	九つ頃大雨、八つ半頃天気	御徒士次り（見廻り）の合力、1ヶ郷14両、百目積り、三ヶ二（？）下され、1組25人割、1人に付2分500文ずつ、諸入用引きて正金2分1朱ずつ受取。	C 納付
045	4月19日	天気	三嶋文司・渡辺誠司郎と3人、どじょう鍋・酒養生に用いる。	G 食事
046			四つ時、麻布一本木で出火、火消し大勢馬乗り、通りにぎやか。九つ頃湿り、多分の焼はなし。	L 火事
047	4月20日	少々曇り、小雨少々間降る	去る14日大変につき、殿様、別当不動院へ祈祷申付け、急発詰合人数に御守下される。	I 祈祷

No	月 日	天 候	事 項	分 類
048	4月21日	晴天	伊勢屋に酒注文、仲間一同にて食べる。	G 食事
049	4月22日	天気	一同妙見社へ参詣、朝飯前後。	I 祈祷
050	4月23日	晴天	相組中養生して、日本橋へ魚買い、中里勉・渡辺源之助・門馬清兵衛3人、3貫文肴買取り、伊勢屋より酒取寄せ、南郷（南標葉郷）8人喰い。	G 食事
051	4月24日	天気	天野定之助・渡部誠司郎と久保町洗湯参り、日かけ（蔭）町・神明前見物。	F 外出
052	4月25日	終日曇り夕刻少々雨（天候の記載のみ）		M その他
053	4月26日	終日雨天	今日より屋舗内洗湯出来、湯銭10文ずつ、町家湯銭12文、茶は8文。	D 詰合
054	4月27日	曇り	御家中岡田惣兵衛病気のため昨夜死去、病体は疫病。	D 詰合
055	4月28日	曇り、四つ頃より晴天	暑気日々相増し暮兼ねにより、座敷割替え、両（北・南）標葉座論などあり、甚だ迷惑。	D 詰合
056			当日より鎗・太刀稽古半日替り。	E 稽古
057	4月29日	晴天	蚊帳買求める様達し、組頭衆小頭付添、赤羽根の竹屋にて当組10畳吊り蚊帳2両、もし不要の場合は1ヶ月1割で返済。七つ時、浪土屋舗に参る、用件不明。	D 詰合
058	5月朔日	朝より曇り、九つ頃より雨降る	宇多郷山上村佐藤庄多郎、飛脚同様下り、御在所書状頼み。この夜大雨。「御在所（領内）ひでの様子承り、多分此雨ハ御在所迄降る可申候、乍遠方悦居申候。」	K 書状
059			市中廻りのとき、夜食が出るが粗末なので、1度1杯のつもりで代渡しか、米にての渡しか、のどちらか勝手次第に決まる。	B 市中廻
060	5月2日	朝雨、四つ頃より九つ頃迄少々降る、それより又大雨降る	詰合小人病気、死去、ころり病（コレラ）かと思われたが、卒中だった。	D 詰合
061	5月3日	晴天	稽古人沢山出席し道具は取付け難しい、道具は御上より貸付。但、2組外持分用意。	E 稽古
062	5月4日	天気	渡辺誠次郎、山下参り、どじょう鍋・酒食い申す。	F 外出
063			節句祝、肴求め天野定之助2人外夫丸、久保町・兼房町土橋参り。生肴無く塩引2本求め、囀取、酒・餅嗣（？）で大祝儀をする。	M その他
064	5月5日	晴天	昨日（5月4日）英國へ応接が及ぶが、弥々打払いしなくてはならない状況。江州井伊様毎度横浜・神奈川固めのため、八つ頃外桜田通る。その勢8丁ほど行列、大砲18丁通る。	J 情報・事件
065			御当家様にて遠士方節句御礼のため麻布へ出殿、市中廻り是まで通り、ただし、防戦のため神奈川表での人数繰出し心得る様達しの趣、中頭衆よりあり。	B 市中廻
066			中頭衆品川出張、神奈川表出陣の場所見物のため。	B 市中廻
067	5月6日	曇り	青山辺りで乱妨あり、御廻り人数心配していたところ、段々話を聞けば、旗本三男、駕籠屋へ賃錢で物言いをしたことであった。	J 情報・事件
068	5月7日	天気	暑気除きのため、酒肴買求め食す。	G 食事
069			屋舗内少々かくらん病（暑気あたりの病）あり。大暑凌ぎかねるほどである。	D 詰合
070	5月8日	薄曇り	井土川恭助と2人で稽古参り、人が少なかったので稽古が沢山でき、道具の使用も差支えなし。	E 稽古
071	5月9日	晴天、無類の酷暑	昨晚神奈川・横浜両所一乱ありと聞き、宇多郷・中郷より2人、今朝明け七つ出立、暮六つ過ぎ帰宅。いたって穩かとのこと。なお一つ橋様（慶喜）下り、御昼横浜にて、同所役人呼寄せ曲直を糾し、まったくの迷惑次第であったが、金子の旨であったので、大八車に十余金子遣わされたところ、穏やかになる。幕府の使者2人参り他言致さぬよう、尤も使者は商人支度。	J 情報・事件
072	5月10日	天気烈しく	梅窓院門前、侍2人駕籠屋で暴れる、近辺より大勢集まり、駕籠屋店主斬られ混雑致し、御当家廻り御昼場天徳寺に替る。	B 市中廻
073	5月11日	朝曇り、四つ頃晴天	白川阿部播磨守様6人稽古に参り、みな名の方。	E 稽古

No	月 日	天 候	事 項	分 類
074	5月12日	晴天、風あり	渡部誠司郎と他出、久保町参り、洗湯、酒肴養生。	F 外出
075	5月13日		鉄炮手入料1丁53文ずつ受取。	M その他
076	5月14日	時雨降る	天野定之助と山下参り、洗湯、酒肴養生、どじょう20疋鍋100文、酒1合100文ずつ。	F 外出
077	5月15日	朝曇り、 昼より晴天	他藩稽古、何れもはげしく稽古あり。	E 稽古
078	5月16日	晴天、風あり	志賀専藏殿・半谷新右衛門殿・山尾清兵衛殿と4人、王子稻荷から飛鳥山見物参り。	F 外出
079	5月17日	晴天	仲間にて1人かくらん病あり、高城先生に頼み薬用、次第全快。	D 詰合
080	5月18日	天気酷暑、 夕七つ頃雷雨	書状認め在所へ下し。	K 書状
081			高輪より品川見物、仲間志賀甚三郎・渡辺誠次郎と3人参り。	F 外出
082			屋鋪触、日光表の御固め人数指出命令の趣あり、6大名帰番御勤めとなる。	D 詰合
083	5月19日	朝曇り	門馬運兵衛先生、三嶋十次殿御供登り仰付けらる、鎗修業九州より四国やな川辺り修業し、今日七つ頃三嶋氏帰宅、上方あたり至って穏かのこと。	D 詰合
084			暑気除け薬7帖下さる。	C 納付
085	5月20日	朝大雨	(門馬)運兵衛先生帰着。	D 詰合
086	5月21日	晴天	三嶋氏、南郷座敷引移る、御扱は急発同様とする。	D 詰合
087	5月22日	天気朝甚だ寒し、 風あり	麻布妙見社へ参詣、一統済む。	I 祈祷
088	5月23日	晴天、朝曇る、 四つ頃晴れる	昨日(5月22日)、在所に鳩屋飛脚で書状下す。	K 書状
089	5月24日	晴天、少々風あり、 至って寒し	天野定之助殿・渡辺誠司郎殿・岡田要之助殿4人、浅草見物参り。	F 外出
090			昨夜(5月24日夜)小石川西の辺り、人殺しあり、殺された者煙草商人の由。	J 情報・ 事件
091	5月25日	昼頃より曇る	門馬運平(運兵衛)先生、三嶋重次殿、演武場で稽古引立てあり、中頭衆出て見届け、御上達の趣、御覧あり。	E 稽古
092	5月26日	朝より曇る、 時々雨降る	伊勢屋に酒注文、刺身を食す、渡辺・中里・志賀・天野・大曲・岡田・梅田・皆野・半谷と。	G 食事
093	5月27日	曇り	稽古参り、当日より改めて与次右衛門先生帳面控え、組頭出席し、1人ずつ控え申上げる様達し。	E 稽古
094	5月28日	朝より曇り	天野定之助殿・梅田伝左衛門殿3人、神田明神・植野(上野)常口山見物、けだ物屋(鰐肉屋)参り、いろいろ取出し食す。	F 外出
095	5月29日	朝より曇る、四つ頃 より七つ頃雨降る	渡部誠次郎・井戸川暁助3人、本町にて、うむとん(うどん)、そうめん、酒取出し食す。	F 外出
096	5月晦日	晴天、八つ半頃よ り俄に大雨降る	三嶋重次殿・渡部誠次郎・井戸川恭助4人、深川見物。	F 外出
097			徒士次り、合力金1人につき1分ずつ受取。	C 納付
098	6月朔日	天気	昨夜(6月朔日)、宇田郷小頭より相談あり、急発一同百日積り、50日越えたので、交代願いについて。	D 詰合
099			一昨日(6月朔日)より眼病流行、迷惑致し。	D 詰合
100	6月2日	晴天	鳩屋飛脚出立、在所へ書状認め下す。	K 書状
101			南風烈しく、昨夜八つ半頃より飯倉五丁目より出火、翌朝四つ頃、当屋鋪間近になり、重役衆指図あり、各々鉄炮持参、御道具麻布中屋鋪へ送る様達しなり、当組20挺7人で送る、寅御門相馬大膳亮内何の誰名乗り通るようとのこと。	L 火事
102	6月3日	晴天	四つになり、西ノ丸出火、実に動搖、由井正雪の謀でもあるのかと、西ノ丸九つ頃までに丸々焼け、虎の御門留めかね、金比羅様焼失、詰合一同覚悟をきめ、支度改め、武具荷物御上御蔵入り、遠土・給人一度に入置き混雜する。	L 火事

No	月 日	天 候	事 項	分 類
103			御廻り人数一番手桜田門御固め仰付られ詰め、残り人数遠士・給人・足軽・小人・夫丸に限らず屋根に登り水を掛け、何れ皆固める、殿様登城、右の様子御覧になり、夫丸までも1人3合ずつ酒下さる。	L 火事
104	6月3日	晴天	町方焼失家数4000軒余、虎ノ門前金毘羅様焼失、八つ半頃火留る。「諸人大気に悦申候」	L 火事
105			その夜、また品川で出火、左程なく留る。	L 火事
106			七つ半頃雨降る、この火事で屋舗内の怪我人なし。	L 火事
107	6月4日	晴天、酷暑	昨日入荷物、三嶋重次殿紛失、4、5日過ぎ御徒士目附宿にあり。	D 詰合
108	6月5日	天気	凌ぎ兼ねにつき他出、久保町・日影丁（日蔭町）に参り、七つ頃帰宅、井戸川恭助と2人。	F 外出
109			何れも眼病にて難儀。	D 詰合
110	6月6日	晴天、少しも風なし、無類の酷暑	今晚より御廻りはまでの人数2つに分け、2丁（約218m）ほど離れる、大勢で廻るとその時だけ鎮まるのみだったので。	B 市中廻
111	6月7日	天気、風あり、暮らしよし、四つ頃雷雨、翌朝まで降る（天候の記載のみ）		M その他
112	6月8日	時々曇り	御廻り、三拾三間堂休み、それより戻り南かやば（茅場）町にて又休み、但し、御茶ばかり、今日より夜ばかり九つ頃戻り。	B 市中廻
113			朽木大城守という旗本、この前の出火のとき鉄炮薬埋置き、使者3人で取掛ったとき薬に火が移り3人とも死去した。	J 情報・事件
114	6月9日	朝曇り、昼頃より大時雨	御屋舗触廻る。	D 詰合
115	6月10日	晴天、極暑強し	組頭・中頭衆より呼出あり、当地穩かにつき、1組25人内6人ずつ宿本手廻りかねる者選定し下す様達があり、幕府には府内廻れる人数で来ていると申立てているので、表立ってはできないので少々ずつ下るように内意あり。	N 帰郷
116			金毘羅詣。	F 外出
117	6月11日	晴天、暑気強し	下り人数選定した後、外2人選定するよう達があり、小高郷志賀専蔵殿・大曲市左衛門殿・北標葉郷猪苅萬次郎殿・渡辺四郎兵衛殿、南標葉郷石川三弥殿・志賀文次殿・松本伴殿計8人（？）選定なる、しかし下りの日の達しなく、土産など心掛る者あり。	N 帰郷
118	6月12日	晴天、風あり、暮らしよし	白川藩4人参り稽古。	E 稽古
119			飯倉町・芝・田町・高輪・品川辺り参る。志賀甚三郎・天野定之助と3人で見物。	F 外出
120	6月13日	天気、風あり	今晚品川出火あり、宇多郷・中郷・小高郷14、5人ばかり屋根に上る、御徒士目附衆と御作事方より御糺あり、当組1、2人おり申訳け翌朝済む。	D 詰合
121	6月14日	晴天、風あるが暑気強し	昨夜の始末、御徒士目附へは岡田要之助殿、御作事へは宇多郷渡部国三郎殿・木幡幾右衛門殿、当組より志賀専蔵殿4人にて申訳けに出て、早速済む。	D 詰合
122	6月15日	天気、風あり	中頭衆、諸郷組頭呼出、急下りの人数近々下るよう達があり、居残り人数も百日積り交代となるが、なお1組25人の内4、5人は1ヶ年詰合となる。今夕はその人数は達しない。	N 帰郷
123			石川三弥殿、出火の頃（6月13日？）より不快、国元にて養生したく、（医師）高城良三様病体書出し、急下り指出願い、斎藤勇八殿取次済み。	D 詰合
124	6月16日	晴天、暑気強し、少々風あり	八つ半頃、公方様（將軍）、御浜御殿から還御した様子もなく、他出の面々が町方で聞いたところ、御浜御殿から（城まで）往来指留めとなつた。京都より船で14日七つ頃帰城したとの様子急飛脚中霞（？）に掛つたところ、俗説に安芸様・長州様両国（現在の広島県・山口県）で境界論があったとの飛脚あり。公方様海上に3日間、御台場より御浜御殿に上り、一つ橋様（慶喜）御迎え、両人同道で入城、しばらく往来指留だったので、「諸人甚だ迷惑仕り候」。	J 情報・事件

「万日記」にみる文久三年奥州中村藩江戸警備の在郷給人の動向

No	月 日	天 候	事 項	分 類
125			公方様、京より還御のこと、屋舗触参り。	J 情報・事件
126	6月17日	晴天、暑気甚だし	石川三弥殿、病気により昨日急ぎ下るよう仰付られ、軽尻1疋、夫丸1人、嶋惣右衛門様二男、是又下り同道のため出立、各々様書状認め頼む。	N 帰郷
127			今朝六つ時石川氏出立。仲間一統裏門まで見送り。	N 帰郷
128	6月18日	晴天、少し風あり	今朝六つ時より諸大名登城。右につき昼前昼後暇願い済み、志賀専蔵・半谷新右衛門・天野定之助・井土川恭助・渡部喜代重・小野田安之丞・渡部誠司郎・志賀甚三郎・松本胖の9人と昼前に済む、九つ帰宅。	F 外出
129			昼後、白川藩6人稽古参る。何れも上手の面々。	E 稽古
130		朝晴天、九つ頃より雷雨、七つ頃まで降る	七つ時地震あり。	M その他
131	6月19日		原野町村井慶助殿、親病気のため急下り暇願い、早速済み明日出立。諸郷へ御見舞い、各々参るべきところ、小頭にて見廻る、その夜大雷雨にて烈しかった。	N 帰郷
132	6月20日	晴天、風あり、昼後より暑中甚だしい	今晚御廻り先、山下川岸で喧嘩ありとの様子、御徒士引き廻ったところ、別条なく帰宅。	B 市中廻
133	6月21日	暑気強し	他出、梅田傳左衛門殿・半谷新右衛門殿・山尾清兵衛・天野定之助殿と5人参ったところ、新大和屋女郎屋、兼ねて取扱いが粗末であつたことから、何方の藩中か30人手組み暴れ、家中逃出し、世帯道具丸々打ちこわしの様子見参り。	F 外出
134		朝雷雨夥し、まもなく晴れ、又曇り少々ずつ降る	妙見社参詣、昼後参り、時々雨にて難儀。	I 祈祷
135	6月22日		白川藩3人稽古参り、5月23日から同28日まで登らせる、公儀武器組32人、但し4人立てにて、剣突鉄炮持参、木刀1本ずつ着す。	E 稽古
136			当日暑氣烈しく暮し兼ね、暑氣除御神酒用いる。	G 食事
137	6月23日	極晴天、暮し兼ねる（天候の記載のみ）		M その他
138	6月24日	晴天	他出、神田明神参り、相撲見物、天野定之助と2人、晴天7日立つ。	F 外出
139	6月25日	無類の暑気、九つ頃曇り	白川阿部播磨守家中3人、道場稽古参り、詰合大勢出る。	E 稽古
140			加藤様御廻り、両国の青柳という茶屋掛で浪士3人乱妨、2人召捕り、1人逃げるところ鎗で空く。	J 情報・事件
141	6月26日	昼頃より風あり	西尾禮之助様京都へ登らせ、京都で浪士大勢召捕り、人数受取りのため。	M その他
142			越後村上内藤紀伊様家来五條京之進、当屋舗に鑓稽古参る、随分上手で当道場江戸でも1、2番という話あり。	E 稽古
143	6月27日	晴天、暑気強し	小高町近江屋金助、屋舗に参り在所の様子を聞く、作方ことのほかよろしいとのこと。	M その他
144	6月28日	昼前曇り、それより晴天	今日より御廻り場所繰替え、市ヶ谷・牛込・小石川・谷中御廻り、御休場は牛込赤木山。	B 市中廻
145	6月29日	天気、少々風あり	都甲伊左衛門様、御廻り最中八頃急死。	D 詰合
146			当日、他藩へ稽古に参り何れも出席するよう。	E 稽古
147		晴天、暑気烈しい、風あるが暮し兼ねる（天候の記載のみ）		M その他
148	7月朔日		昨夜（6月29日）触あり、今朝六つ時殿様登城、九つ時帰殿。今晚御廻り場、霞ヶ関・麹町三丁目裏町通り横町四つ屋舗・市ヶ谷御門・寺町、正玄寺休み。	B 市中廻
149			夜四つ頃出火、品川浦沖舟。	L 火事
150		曇り、五つ頃時雨降る、すぐに晴れる	昨日（7月朔日）達し、難病追々相募りにつき、麻布不動院祈祷、麻布妙見社詰合一統下々まで参詣、四つに参り、九つに帰宅。	I 祈祷
151	7月2日		組頭・中頭衆呼出、直達。残暑強く数日勤労、御廻り人数へ御神酒頂戴、1人3合ずつ、御肴代料一人前100文ずつ。久保町より蕎麦取寄せ、大気に頂戴し鉢（？）酒暴食により病発、医師より“以ての外”と戒めをうける、何れも相心得る。	C 納付

No	月 日	天 候	事 項	分 類
152			今日より麻布へ鉄炮数試し稽古に詰める、的打なし。	E 稽古
153	7月3日	朝間時降り、直ちに晴れ、風あり、暮しよし	昨日（7月2日）達しの通り、御守頂戴、斎藤勇八様麻布に参り留守ゆえ、翌日志賀専藏殿参り、1人1守ずつ下さる。	I 祈祷
154			大川原村清十郎という召使欠落、山下に居るのを見つけ、縄付けて4,5日置き、又奉公勤める。	D 詰合
155			今晚より御廻り場所替わる、本廻り青山辺り、小石川2夜廻りなり。	B 市中廻
156	7月4日	時々雨降る	昼前鎗稽古、越後内藤家来出る、昼後麻布鉄炮稽古に参り。	E 稽古
157	7月5日	晴天、風あり、暮しよし、	赤羽根水天宮参詣参り、戻りかけ、赤羽根橋で、八つ頃月の側に星見え、不思議である。	F 外出
158	7月6日	晴天、残暑強し	先達て（6月11日）御下り選定、人数31人下るよう達し、先登り順に下る。11日出立宇多郷、13日北郷、15日小高・両標葉、志賀専藏・大曲市右衛門・岡田要之助・渡部四郎兵衛・志賀文治、右人数下り、17日中野郷出立。	N 帰郷
159	7月7日	晴天、昼頃より時々曇り	当日七夕につき、稽古休み。	E 稽古
160	7月8日	朝七つ頃大雨降り、五つより晴れる	他出願い済み、本町・日影町参り、久保町どじょう鍋・しちも鍋（しゃも鍋？）・御酒喰う。	F 外出
161	7月9日	曇り、五つ半頃降り、八つより晴れる、間もなく曇る	御廻り方降る（ママ）。	B 市中廻
162	7月10日	朝七つ半大雨降る、五つ頃晴れる	今日残り人数半年勤め仰付けらる。渡部喜代杔殿病気につき、在所知らせ書状家中渡辺富三様認め指下す。	D 詰合
163	7月11日	晴天、四つ時時雨降る	宇多郷下り人数 7人、六つ半時出立、裏御門で見送る。当日、御廻り先供割する侍がいた。川越様藩の由。今日の徒士次り合力280文頂戴。	N 帰郷
164	7月12日	朝七つ頃大雨、篠を突くよう降る、四つ時頃小降り	今晚道場へ井戸川兩人で人数なく参り。	E 稽古
165	7月13日	曇り	7月2日（領内から？）嶋屋へ味噌送り、今日屋鋪へ届く。	M その他
166	7月14日	晴天	明日当組より下り、久保町丸屋より蕎麦・餼鈍取寄せ、酒5升祝儀。同日千住に荷物送り、付添首尾方岡田要之助殿・大曲市右衛門殿出立、一統裏御門まで見送り。	N 帰郷
167			小高・両標葉出立、六つ時志賀専藏殿・渡部四郎兵衛殿・猪苅万次郎殿・志賀文次殿、一統裏御門まで見送り。	N 帰郷
168	7月15日	晴天	北標葉座敷立払いにつき、斎藤勇八様・門馬清兵衛殿・梅田傳左衛門殿、其の座へ引越。	D 詰合
169			昼後洗湯へ参り、山下通り鮓（どじょう）鍋養生用いる、同道天野定之助。	F 外出
170			鎗先生へ盆見舞いとして温麦200文分指上げ、小高・両標葉一統、昨日（7月15日）中頭衆見舞、金1朱酒1升指上げ、出銭1人17文ずつ取立。	M その他
171	7月16日	晴天	外出、芝の増上寺参詣、今日は御門上まで参詣、登口履物無用、1人につき4文ずつ「□づりヲル物（ママ）」あり、同道井戸川暁助・渡辺誠司郎3人参り。	F 外出
172	7月17日	晴天、今朝甚だ寒し	六つ時、中之郷方7人出立、裏門まで見送り。	N 帰郷
173			盆中は稽古休み、今夕より始める。	E 稽古
174	7月18日	晴天	北郷斎藤歌右衛門殿・宇多郷松本金次郎殿、病につき明日出立の予定が、千住に荷物首尾方につき、今日出立、裏門まで送る。	N 帰郷
175	7月19日	晴天	今日は二百十日、五つ頃少々曇りだし、それより晴れ、月があった。	M その他
176	7月20日	晴天	内藤紀伊守より四条恭之進、白川藩田邑雄之丞・青木宗紀・牧村常吉・井上守三郎・梅村惣三郎参り稽古す、詰合一統稽古烈しかった。	E 稽古
177	7月21日	天気	中頭金谷平左衛門様・池田喜左衛門様、宇多郷組頭佐伯源助様、給家下りにつき頭衆として御下り、一統裏御門にて見送り。	N 帰郷

No	月 日	天 候	事 項	分 類
178	7月22日	少々曇り、四つに少し降る	公方様、増上寺へ御下り、昨日（7月21日）屋鋪触あり。今日四つ時になるので、五つ頃から九つ頃まで戸締り、煙などまで出すこと無用仰付けらる。	D 詰合
179	7月23日	明け七つ頃より雨降る	召使の者、久保町まで雑事述べて出す。	D 詰合
180	7月24日	朝の間降り、それより曇り	当日交代方参り、交代の方参る心得一節（一切？）なし、小高・両標葉、裏門より九つ時着、荷物居宅に送り混雜した。	D 詰合
181		曇り、	先詰め人数2日半支度、27日出立仰付けらる。外出一統済み、交代方、昼前・昼後半日ずつ済み、右詞物参り（挨拶まわり？）。	N 帰郷
182	7月25日	昼頃より降る	渡辺誠次郎殿・三嶋重次殿、交代の泉田熊喜殿と4人、山下より日本橋本町より（ママ）登り、神明前・日影丁・久保町で御酒どじょう鍋いろいろ取寄せ食す。	F 外出
183			昼前詞物参り、昼後より荷物拵え、交代方手伝い受け、混雜す、千住に送り、首尾方井戸川暁助・菅野省吾・山田勘之助3人参り、御扱路用貸銭下され頂戴す。	N 帰郷
184	7月26日	朝曇り、昼より晴れる	これまで用膳椀一人前438文ずつ達しあり、指上げ膳は足無し椀・二の椀・二つかさね1つ、指上げ申す、明日下りにつき祝儀の儀あり、酒肴沢山取寄せ。居組頭才藤勇八様、夜五つ半頃、俄かに病気になる、手足物言分かれかね、何れも気の毒にと思い、早速医者高木良三様にみてもらつたところ、左程の病気でないとのこと、一統安心するが、2、3日で病死、骨で下る、山尾清兵衛殿居残り。	N 帰郷
185	7月27日	晴天	朝五つ時出立、中頭衆一礼、一統裏御門御出見送り受ける。	O 出立
186			松戸昼100文、我孫子泊350文。	O 出立
187	7月28日		牛久宿昼150文、土浦泊り、旅籠350文。	O 出立
188	7月29日		片倉昼170文、水戸泊350文。	O 出立
189	7月晦日		森山昼、石町泊350文、このところ大井村半谷新右衛門殿病気にて、岡田傳左衛門殿、羽鳥村中里勉殿居残り。	O 出立
190	8月朔日	大雨	神岡参り、大雨にて九つより逗留、昼・泊りまで400文。	O 出立
191			勿来の関岩落で通行難しく大津へ廻る、平泊350文。	O 出立
192	8月2日		平・湯本間に藤宿（？）で三嶋重次殿、俄かに病気、渡部誠次郎・松本肝2人居残り。	O 出立
193	8月3日	雨天	井戸川暁助殿大川原夜通し参り直ちに入参、私共の荷物を世話して参る所、広野で御目にかかり、委細御話あり。	O 出立
194			道中筋難場で人馬指止、九つより逗留。昼より泊りまで400文。	O 出立
195	8月4日	晴天	富岡昼、熊ノ町へ参り、玉記殿鞍馬にて向い、検断参り酒頂戴す、熊七つ半立ち、新山に参る、富沢新右衛門様・富沢金次様検断衆一統御目にかかり、五つ頃帰宅す。御屋鋪御方無難にて御一統御出で御目にかかりいろいろ物語す。	P 到着
196	8月5日	晴天	（なし）	P 到着
197	8月6日	晴天	（なし）	P 到着
198			井戸川恭助殿と申合せ、小高妙見社に参詣、戻りに岡田村前にて、半谷新右衛門殿御目にかかり病気順快にて御出でになる。	P 到着
199			当日、三嶋重次殿帰宅。	P 到着
200	8月7日		耳谷村天野定之助殿に立ち寄り、いろいろお取出しがあったので頂戴す、井戸川氏は御泊りになる。	P 到着
201			「急発詰合一統、無難ニ而大慶至極ニ奉存候」	P 到着

奥州中村藩主・相馬家所用と考えられる甲冑——栗色塗縦矧二枚胴具足

二上 文彦

はじめに

令和四年（二〇二二）、筆者が担当した企画展「相馬野馬追収蔵資料展」^{*1}

において、新発見となつた甲冑・栗色塗縦矧二枚胴具足（個人蔵・写真^{*2}）を奥州中村藩主相馬家所用と考えられる資料として展示した。

当地方の領主だった相馬家所用の甲冑は、現存するものとして相馬家の伝世品が二領^{*3}、伝世品ではないが相馬家所用と考えられるものが二領^{*3}と兜一頭、現存は確認されていないが、古写真に写っているものが三領^{*4}、合計七領・一頭が確認されており、本甲冑は八領目の確認と位置付けられる。

本稿では、本甲冑の概要および相馬家所用とするに至る考察を述べるものとする。

一、甲冑の解説

本甲冑は、兜、面頬、胴、袖、籠手、佩楯、臑当から構成され、その他具足櫛が付属する。以下に各パーツの解説を述べる。

（一）兜

革製の栗色塗三十二間筋兜（写真2）。ほぼ起伏のない円山形のような半球形をしている。左前頭部に試し撃ち痕のへこみが見られる。鉢の四方に赤銅・金銅の座金付きの響穴、四天鉢を付し、後部に赤銅

の笠印付鎧を付す。腰巻に唐草毛彫りの赤銅覆輪をめぐらす。天辺座は金銅の葵葉座・透菊座・裏菊座・小刻座・抱花・玉縁の六段。銘は受張により確認できない。

眉庇は、鉢の腰巻と同仕様の覆輪をめぐらした栗色塗の付眉庇（三光鎧で固定）。中央に唐草透かし彫り、金銅の「九曜紋」据文入りの鍬形台（写真3）を菊鎧で据え付ける。

鍬形台に金箔押革製の鍬形を挿す。鍬形は先端の幅が広く外方へ開く形状。前立は尾を丸めた龍で、本体は木製、四肢は鉄製である。

吹返は鉢の腰巻、眉庇と同仕様の覆輪をめぐらした角型吹返。赤銅の「亀甲に花角紋（相馬亀甲紋とも）」の据紋金具（写真4）を付す。輪は黒漆塗切付小札紺糸毛引威五段下りの饅頭輪。肩摺板の左右に唐草文、九曜紋の透かし彫りを施した杏葉形の飾り金具（写真5）を付す。

（二）面頬

鉄鍛地烈勢頬（写真6）。裏面は朱漆塗。耳が付属し、黒色の口鬚が植えられている。頬が大きくしゃくれ、頬下には汗流しの穴と花菱座金が付いた緒便金が二本付属する。頬の皴の打ち出しは典型的な皴と異なり、枝分かれした鉤爪のような曲線を打ち出している。

垂は黒漆塗切付小札紺糸毛引威四段下り。裾板には畦目・緋糸菱綴一段、五か所に透かし猪目を施す。

奥州中村藩主・相馬家所用と考えられる甲冑 一 栗色塗縦矧二枚胴具足



写真 1 栗色塗縦矧二枚胴具足



写真3 鉢形台



写真4 吹返（左側）



写真5 鞍の飾り金具





写真8 前胴



写真9 後胴



写真10 肩上と立襟



写真11 障子板



写真7 胴

垂の札板（威糸、裾板の形状・綴など）にみられるように、他のパートと仕様が異なる部分が多いことから、後補のパートとみられる。

栗色塗縦矧二枚胴（写真7）。前胴中央に鎬を設けた鳩胸胴様式である。総体的に革製で、胸板、押付板、肩上は鉄製である。

（三）胴

栗色塗縦矧二枚胴（写真7）。前胴中央に鎬を設けた鳩胸胴様式である。総体的に革製で、胸板、押付板、肩上は鉄製である。

前胴（写真8）は、中央部に金箔押の大きな九曜紋の据文が施されている。その九曜の中心には試し撃ち痕のへこみが見られ、表面の金箔が剥がれ下地の朱漆が露出している。赤銅の両乳鑓を付す。胸板は前立挙中央の蝶番で繋がっており、兜鉢の腰巻・吹返と同仕様の唐草毛彫りの赤銅覆輪をめぐらし、中央部に赤銅の亀甲に花角紋の据文金具を付す。脇板は胸板と同仕様である。

後胴（写真9）は前胴同様に縦矧で、左下部に試し撃ち痕のへこみが見られる。発手右側に唐草毛彫りの赤銅の繰縞鑓を付す。後立挙中央に赤銅の総角付鑓（台座は唐草透かし彫りの赤銅製、木瓜形）を付す。合当里は角合当里で待受は欠損している。押付板は胸板・脇板と同仕様で、紺糸菱綴により後胴立挙と繋がっている。

肩上（写真10）は、蝶番で押付板と繋がっており、切付小札紺糸毛引威の小鰯と、唐草毛彫りの赤銅覆輪をめぐらした障子板（写真11）が付属する。肩上先端に杏葉を付属させる蝶番が見られるが、そこに付くはずの杏葉は欠損し、代わりに高紐に結び付けるタイプの後補の杏葉が付属する（写真12）。杏葉には九曜紋の据文金具が付属するが、据文も後補とみられる。

押付板から肩上の内側に、立襟・肩当が付属する（写真10・13・14）。家地は波に唐花文の緞子である。立襟の亀甲縫の内部には、本来あるはずの亀甲金が縫い込まれていないほか、小縁の縫い目が粗いなど総体的に仕上げが甘く、江戸期の作とは見えず、近代以降の後補と思われる。

草摺は黒漆塗本小札紺糸毛引威で七間五段下り。腰革付で靴による着脱式。搖糸の裏には六間の布帛が付属している（写真14・15）。従



写真 12 肩上の先端と杏葉



写真 14 胴裏



写真 13 立襟 (後部から)



写真 15 草摺裏の布帛

来このような布帛には鎖を綴じ付けて腰鎖としての機能を持たせるが、本布帛に鎖は綴じ付けられていない。家地が立襟・肩当と同様であることから、それと同時代（近代以降）の後補とみられる。おそらくもともとは腰鎖が付属しており、後世の補修の際にそれを模倣し、布帛のみ取り付けたのであろう。

四 袖

黒漆塗本小札紺糸毛引威七段下りの大袖（写真16）。緋色の受緒、懸緒、水呑緒を付す。

冠板は栗色塗で唐草毛彫りの赤胴覆輪をめぐらす。化粧板は菖蒲革を張り、唐草透かし彫りの赤銅八双金物（亀甲に花角紋の据文金具あり）を三点付す（写真17）。赤銅の笄金物は唐草透かし彫りで九曜紋の据文を付す（写真18）。裾板は紺糸菱綴二段、前後端に透かし猪目



(オモテ)



写真 16 袖

を施す。

(五) 篠手

栗色塗五本篠手（写真19）。上腕部には篠金を散らし、中央に「丸に九曜紋」の据文金具を付す（写真20右）。

手甲は海鼠手甲で、通常の手甲より親指・掌外沿の側面に一枚ずつ多く鉄板を増強している。手甲中央に上腕部同様の丸に九曜紋の据文が見られるが（写真20左）、こちらは上腕と異なり刻芋を盛上げて形成したものに見える。観察すると仕上げが甘く、後世に補修もしくは新たに追加されたものとみられる。

上腕から前腕部の家地は、先述の立襟・肩当、搖糸裏の家地と同じく波に唐花文の緞子であり、それらと同時代に仕立て直しが行われたとみられる。なお、脇当の家地は上腕から前腕部と異なり、枝梅文の



写真17 右袖化粧板の八双金具と「亀甲に花角紋」の据文金具（拡大）



写真18 右袖の笄金物



写真20 「丸に九曜紋」の据文手甲（左）と上腕部（右）



写真21 脇当の家地（上部） 上腕から前腕部の家地と仕様が異なる。

緞子である（写真21）。この枝梅文の緞子が、元来の家地だった可能性もある。



写真19 篠手

(六) 佩楯

栗色塗伊予佩楯（写真22）。踏込式。伊予札は一列二十五行の五段下り。力革、於女里、鞭指等は正平革、菖蒲革、伏縫で構成されている。裏地は紺麻地。

家地や伊予札の塗りなど、ほかのパーツと比較して仕様が異なることに加え、小縁や各絵革の縫い目の粗さも目立ち品質が劣ることから、後補のもので、仕立ても近代以降に行われたものとみられる。

(七) 膳当

黒漆塗七本篠膳当（写真23）。立挙は紺糸菱綴の亀甲立挙。家地は胴の立襟・肩当および籠手（上腕から前腕部）に同じ。鉗具摺革は合皮のような素材で作られている。小縁は菖蒲革。

篠金具や鎖などの金具類は古い部材を使用しているが、仕立ては近代以降とみられる。家地が先述の立襟・肩当、搖糸裏、籠手と同様の綾子であることから、これらを同時期に仕立て直したとみられる。



写真23 膳当



写真22 佩楯

(八) 具足櫃

六本の脚が付属した唐櫃式で、前後面に九曜紋・亀甲に花角紋が浮彫りされている（写真24・25）。塗りは後補とみられる。



写真24 具足櫃



写真25 具足櫃の浮彫り（左が前面、右が後面）

(九) その他（采配）

本甲冑のもともとの附属品ではない可能性が高いが（後述）、采配が存在する（写真26）。柄は朱漆塗で、柄の先端・末端が唐草毛彫の金銅製金具で覆われている。采は緋絹である。

采配には収納箱が附属する（写真27）。総体が黒漆塗、身の側面には九曜紋の座金付き紐金具を付す（写真28）。蓋には金泥で「毘沙門再拝 平昌胤」と記される。平昌胤とは、江戸時代前期から中期の五代奥州中村藩主の相馬昌胤（一六六一～一七二八、相馬家二十一代当主）と解される。毘沙門再拝（采配）という名称も含めて、史料にて

代理人の大久保宇三郎についての情報は承知していないが、売主の相馬胤真は、藩主相馬家一門衆「御一家」の相馬将監家出身で、相馬神社の社司を務めたほか、明治から大正期には、当地方の伝統行事である野馬追の総大将も務めていた人物である。また買い手の「館岡虎蔵」は、中村（相馬市中村）の商人だった館岡虎三（以下「虎三」）のことであろう。虎三は好事家で郷土史家でもあり、相馬地方の古物収集も積極的に行っていた人物である。また、虎三はこの采配を入手後、収納箱の外箱を製作したらしく、現存する外箱の蓋裏には「館岡家蔵」と箱書きがある（写真30）。売渡証と箱書きにより、采配が少なくとも大正時代には相馬胤真や館岡虎三が所有していた、つまり相馬地方に存在していたことがわかる。

なお、虎三の子孫である館岡敏美氏への聞き取り調査によれば、同

証文には、采配に「筭」が附属している旨も記されているが、その筭は見当たらない。

本采配の記録を確認できないため、現段階で相馬昌胤所用と断言はできないが、伝相馬昌胤所用とはいえるよう。また、本采配については、近代の「売渡証」が残っており（写真29）、大正十二年（一九二三）六月九日付で、「相馬胤真」の代理人「大久保宇三郎」が、「館岡虎蔵」に采配を一〇〇円で売却した、という旨が記されている。本

写真 26 采配



写真 28 収納箱の紐金具



写真 30 外箱の箱書き



写真 27 采配の収納箱

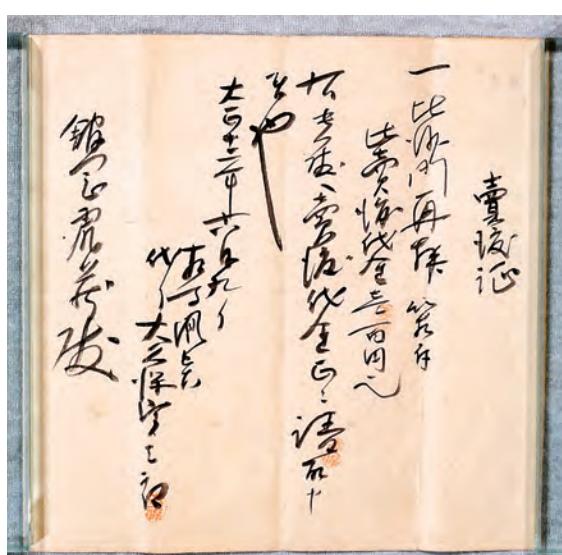


写真 29 売渡証 大正 12 年（1923）6 月 9 日 相馬胤真（代理人・大久保宇三郎）から館岡虎蔵

氏の母からの伝わる話として「相馬の殿様の采配が自宅にあつたが、昭和三十年代に売却した」とのことである。敏美氏が言う「殿様の采配」が本采配に該当すると断言はできないが、関連性を想起させるエピソードであり、その可能性は十分にあるものと考える。

以上、甲冑および附属品の概要を述べた。甲冑は適度に加飾が施された当世具足であり、八幡座、据文金具、覆輪等の金具類は絢爛豪華とはいえないが相応の丁寧な細工が施され、技術水準の一定の高さを感じさせる。総体の造形や装飾から江戸時代の製作であることに間違いない、製作年代を少し絞るならば、本来であれば当世具足に必要がない装置である障子板が附属するなど、甲冑への加飾の度合いが増してくる、江戸時代中期以降とみるのが妥当ではなかろうか。

兜、胴、袖については、据文金具や覆輪等の仕様からみて同作と考えられる。籠手は別パーツの可能性もあるが、後世に補修されたであろう手甲の据文を除けば、上腕部の据文金具も相応に丁寧であり、兜や胴の栗色塗との一定の統一性は感じられる。

面頬、佩楯、臑当については、ほかのパーツと仕様が大きく異なるところがあり、後補とみられる。また、胴の立襟・肩当と搖糸裏、籠手、臑当の家地は同仕様（波に唐草の緞子）であり、縫い目をはじめ仕立ての粗さが見え、江戸時代の甲冑師の仕事には見えない。これらのパーツは近代以降の同時期に仕立て直しが行われていることが推測される。胴の杏葉も同時に後補された可能性がある。

二、所用者の考察

本甲冑には、製作した甲冑師等の銘もなく、所用者名をはじめ、正確な年代等を知るための手がかりが見当たらない。唯一、采配が相馬昌胤

所用と考えられることのみである。このように情報が僅少である前提のもと、以下に、中村藩主相馬家所用と考えるに至る考察および付随する知見を述べる。

(一) 甲冑各所の家紋

江戸時代の大名家の甲冑は、武家の表道具の証として、各所に金物や蒔絵等で自家の家紋を表すことが多い。^{*8} したがって、家紋から、所用した家系を推定することが可能である。

本甲冑においては、兜、胴、袖、籠手に九曜紋や亀甲に花角紋といつた、奥州中村藩主相馬家のみが使用した家紋の組み合わせが見られることから、同家において所用されていたものと考えられる。相馬家はそう大きくない大名家ではあるが、先述のように、金具類の細工には大名具足として一定の水準を保っていると思われる。

また、甲冑各所の家紋のうち、亀甲に花角紋が使用されたのは、少なくとも寛保二年（一七四二）以降と考えられる。^{*9} 当時の藩主は七代藩主相馬尊胤（一六九七～一七七二、相馬家二十三代当主）であることから、亀甲に花角紋が観察できるこの甲冑は、相馬尊胤以降の当主、もしくは子弟の所用と考えるのが妥当であろう。

なお、一九九〇で述べた、采配の所用者と考えられる相馬昌胤は、その亀甲紋を使用はじめたという寛保二年の時点で亡くなっている（享保十三年「二七二八」死去）。とすると、甲冑と采配の製作年代は異なるものとなる。現在は一式となっている甲冑と采配は、もともと一式ではなかつたと同時に、昌胤が甲冑の所用者である可能性はほぼないともいえる。

(二) 史料による本甲冑に関する記載

本甲冑そのものを単刀直入に示す史料は、管見では確認していない。ただし、一^(一)および一^(二)で述べたように、兜・胴は革製である。革製の甲冑については、相馬家の年譜『相馬藩世紀』寛保二年（一七四二）十一月八日の条に、奈良居住の甲冑師「春田丹波」に発注していた「革御具足」が完成した、という記載がある。

それによれば、その春田丹波作の革具足には小具足として「脇引・まん¹⁰」が付属していたようである。「まん¹⁰」とは満智羅のことであろう。

本甲冑には脇引と満智羅は付属しておらず、史料の記載と本甲冑の仕様は一致しないことから、本甲冑は寛保二年に完成した春田丹波作の革具足には当たらないといえる。ただし、脇引や満智羅といった小具足が紛失、欠損することはままあり得るため、「革具足」という共通点が記載された数少ない史料として、また今後の研究材料として紹介した。

(三) 近代野馬追で使用していた可能性

本甲冑は、当地方の伝統行事である野馬追で使用されていたとみられる。以下にその要点を紹介する。

① 左袖に付属する紐罠

明治時代以降の野馬追では、祭礼出馬者の所属、役職、氏名を示すため、左肩に「肩印」を付ける慣習があり¹¹（写真31）、それを付すため、自身が着用する甲冑や陣羽織の左肩に、紐罠等の装置を仕付けるのが通例である。

本甲冑にも、左袖の化粧板付近のみ紐罠が付属していることが確認できる（写真32）。これは、肩印を付属させるための装置とみられ、

② 相馬胤真が本甲冑を着用している写真

野馬追は相馬地方の名物として知られ、近代には土産物として多くの写真絵はがきが発行されたが、それらのなかに写真33がある。中央に写る甲冑姿の騎馬武者は、先述の一^(九)で采配の売主として紹介した相馬胤真である。撮影時期は特定できないが、明治後期から大正期あたり、野馬追の総大将を務めた際に撮影されたものであろう。

当時の絵はがきとともに画像が不鮮明ではあるが、少なくとも古写真に写る兜は、尾を卷いた龍の前立、先端がやや幅広の錍形、錍形台の中央に据えられ光沢を放つ九曜紋の据文金具、丸みをおびた兜鉢、丸く張り出した饅頭形の輪の形状などが確認でき、



写真31 甲冑に肩印をつけた例（総大将・相馬行胤氏 2020年7月25日撮影）



写真32 左袖にのみ付属する紐罠（矢印）
右袖（写真17）には見当たらない装置である。

本稿の甲冑と同一である可能性が極めて高い（写真34）。

袖も似ているが、同一の可否の判断は難しい。また、前胴立挙に見られる八双金具らしきものや、籠手の鎖の組み方および手甲の形状、佩楯の札の状況から、胴、籠手、佩楯は本稿の甲冑とは異なるものであろう。

野馬追は、近世まで藩主相馬家の行事として行われ、近代以降は神社の神事として旧藩領内で継続したが、藩主相馬家は、廢藩置県以降に東京に居住したことなどもあり、野馬追に出馬することはほぼなくなった。近代野馬追では、藩主相馬家のいわば名代として、総大将は旧領内に在住していた藩主一門衆「御一家」の人物がおもに務めており、相馬胤真もその一人であった。¹² その胤真が着用している甲冑のなかに、藩主相馬家所用と考えられる兜が含まれているのであるから、胤真は、藩主相馬家からの下賜、借用等、何らかのかたちで入手し身に着け、それが撮影されたのである。この写真のみでは、甲冑が胤真の所有物だったかは判断できないが、少なくとも近代以降の野馬追において総大将の着領として本稿の甲冑が使用されたことともに、当時相馬地方に存在していたことを示す、貴重な写真であることは間違いない。

なお、野馬追は、参加者が甲冑を実用品として身に着ける祭礼であり、激しい動きや雨風などの悪天候によって、甲冑を傷めることは常に起こる。特に腕、脚、首など、頻繁に可動する部位を覆う小具足類（籠手、佩楯、臑当、立襟など）は消耗しやすい。先述のように、本甲冑の小具足類が後世に補修された痕跡や後補のパーツが多いのは、野馬追行事に使用され、消耗・損壊したことを示しているのかもしれない。



写真34 本甲冑と、絵はがき写真の比較
兜は同一の可能性が極めて高い。



写真33 絵はがき「総大将相馬子爵代理」（筆者蔵）
甲冑を身に着けた騎馬武者が相馬胤真

まとめ

以上、甲冑の所用者についての考察および、それに付随する知見を述べた。先述の甲冑の解説とともにまとめるに、下記のとおりである。

- ・甲冑各所にみられる家紋から、奥州中村藩主相馬家所用と考えられる。相馬家による亀甲に花角紋の使用年代から、七代藩主相馬尊胤以降の相馬家当主、もしくは子弟が所用したと考えるのが妥当であろう。

- ・附属品の采配は伝・相馬昌胤所用であるが、甲冑にみられる亀甲に花角紋から、所用者が昌胤である可能性は低い。

- ・甲冑は、いわゆる一作物ではなく、小具足類は後補のものが多い。また、近代以降に補修されている箇所も多くみられる。

- ・近代の野馬追の際、本甲冑は行事で使用されたとみられる。少なくとも総大将を務めた相馬胤真は、本甲冑の兜を使用したとみてほぼ間違いない。

本甲冑のように、史料に記載が無い武具類について、所用者や制作年代を特定するのは難しいが、状況証拠から以上のような推測が得られた。現段階では「相馬家所用と考えられる」と表現するにとどめざるを得ないが、近代以降とはいえ、相馬地方に所縁がある可能性が極めて高いことが判明し、部分的ではあるが、甲冑の資料的価値を見出すことはできたと思われる。また今後、新たな史料の記載や事柄が判明した場合には、改めて述べることとした。

【註】

1 南相馬市博物館主催。会期・令和四年（二〇二二）七月九日～九月二十五日。本稿の甲冑をはじめ、当館収蔵の甲冑武具類、戦後以降の野馬追ポスター等を展示した。

2 「朱漆塗萌黄糸威横矧五枚胴具足」と「黒漆塗本小札緋糸威二枚胴具足」。いずれも相馬和胤氏蔵で相馬市指定文化財

3 甲冑は「黒漆塗白糸素懸威異形胴具足」（佐川広直氏蔵、拙稿「近代に展示された相馬義胤の甲冑・肖像画―古写真を中心に」）、「黒漆塗縦矧五枚胴具足」（個人蔵、南相馬市博物館令和四年度企画展「相馬野馬追収蔵資料展」パンフレット〔二〇二三〕所収）。兜は「白熊兜」（柏原美術館蔵）がある。

4 昭和三年（一九二八）中村（相馬市中村）で開催された展覧会において、戦国武将相馬義胤所用の甲冑として展示されたもの（拙稿「近代に展示された相馬義胤の甲冑・肖像画―古写真を中心に」）、同年、仙台で開催された「東北遺物展覧会」で中村藩二代藩主相馬義胤所用の甲冑として紹介されたもの（『東北遺物展覧会記念帖』）、昭和十六年（一九四一）四月に東京で開催された「興亞馬事大会」で披露された臨時野馬追の際、総大将を務めた相馬甫胤（相馬孟胤三男）が着用した甲冑（『興亞馬事大会記念写真帖』）がある。

5 相馬胤真（一八五八～一九二九）は、相馬神社の社司であり、近代野馬追において旧藩主相馬家に代わり、総大将を何度も務めた（註12参照）。また和式馬術「大坪当流」の師範として、多くの門弟を育成した（『相馬の馬』三九頁）。

6 御一家は、歴代が藩政の重職を担った藩主相馬家の一族一門衆で、岡田、堀内、泉、泉田、相馬将監、相馬鞍負（主税）の六家を指す。相馬胤真の出身家である相馬将監家は、初代藩主・相馬利胤の弟、相馬及胤を祖とする家系。安胤（清胤）の三男で「将監」を名乗った胤充（初名胤延）が、五代藩主・昌胤の信任を得て藩政に参画するなど活躍し、元禄九年（一六九六）二月、御一家に順ずる家柄であることを告げられ、元禄十二年（一六九九）九月から、正式に御一家の家格に列せられた（『相馬藩世紀』第二）。

7 鎌岡虎三（一八六六～一九二六）は、「春波」と号し俳人としても活躍。郷土史家として「相馬近世史」（『相馬市史2・各論編1 上巻』所収）等を著した（『相馬市史2・各論編1 下巻』七六一頁）。

9 8 『大名家の甲冑』二八頁

相馬家の「亀甲に花角（相馬亀甲）紋」は、『相馬藩世紀』寛保二年（一七四二）九月朔日の条（『相馬藩世紀』第二二八二頁）によれば、武鑑に相馬福胤（相馬昌胤の子。相馬鞍負家の祖）のことを書き入れることとなつた際に、相馬家の家紋として九曜紋・繫馬紋に加えて「亀甲御紋」を新たに書き入れることにしたことが記されている。相馬家の紋として亀甲紋を正式に使用するようになったのは、この頃と推測される。ただし武鑑をみると年代によつて何らかの理由により亀甲のパターンが一重、二重、三重と変化しているようだ。

現段階では、本甲冑のように二重亀甲が使われた理由は特定できないない。

10 『相馬藩世紀』寛保二年（一七四二）十一月八日の条（『相馬藩世紀』第二二二八五頁）

一、十一月八日、革御具足一領、春田丹波二先達被仰付置、今日出来、於江戸指上之、

惣而御具足之製作之善ハ、御身ニあたる所なく御召能、自然と御動も御自由之由、御家ニ伝リ之黒塗糸真紺胴、おもたか形勝而宣キ御具足、御甲ハ、大永年中之信家作也、此具足に脇引まん〔 〕附右両品ハ鑑に付候也、丹波事、居住奈良之者也、具足仕立家ニ而功者故、江戸ニ而被仰付、今日出来、御前麻御上下ニ而、御のし御吸物上御祝儀有之、丹波御目通江被召出、於御勝手御料理被成下、白銀十五枚頂戴被仰付、御家老・御用人・御留守居御祝儀申上ル、御具足御用掛リ新谷五郎左衛門ニ麻御上下、御刀番山田喜内、御納戸役水谷伝兵衛ニ御目録貳百疋宛被下之

11 野馬追における肩印使用の記録は、明治九年（一八七六）が初見で、出馬者は長さ七寸程、幅三寸の白布に「何村／何ノ誰」と居住地・氏名を記した肩印を付けるよう通達があった（吉田屋（館岡氏）覚日記）明治九年六月二十八日の条「野馬追規則」。

12 管見では、相馬胤真が近代野馬追において総大将を務めた年として、明治四十一年（一九〇八）と大正四年（一九一五）・同五年（一九一六）の記録を確認している（『福島民友新聞』明治四十一年六月二十五日付、『福島民報』大正四年七月十三日付、『福島民報』大正五年七月九日付）。上記以外でも務めている可能性が高い。また、明治四十一年十月九日、皇太子嘉人親王が東北地方巡幸で原町に立ち寄った際、臨時に行われた台覧野馬追という、重要な舞台においても総大将を務めた（明治四十一年十月八日付『福島民友新聞』）。

【参考文献】

- 二上文彦「近代に展示された相馬義胤の甲冑・肖像画・古写真を中心にして」『南相馬市博物館研究紀要 第十一号』南相馬市博物館（二〇〇九）
- 山岸素夫・宮崎眞澄『日本甲冑の基礎知識 第二版』雄山閣（一九九七）
- 『興亞馬事大会記念写真帖』（財）写真協会（一九四二）
- 『相馬市史2 各論編1 論考』福島県相馬市（一九七八）
- 『相馬の馬』南相馬市博物館（二〇〇九）
- 『相馬野馬追収蔵資料展』パンフレット 南相馬市博物館（二〇一三）

『相馬藩世紀 第二』続群書類從完成会 岩崎敏夫・佐藤高俊校訂 岡田清一校註（二〇〇一）

『大名家の甲冑』株式会社学習研究社（二〇〇七）

『東北遺物展覧会記念帖』東北遺物展覧会出版・菊田定郷編（一九三三）

『福島民報』福島民報社 福島県立図書館所蔵マイクロフィルム

『福島民友新聞』福島民友新聞社 福島県立図書館所蔵マイクロフィルム

『吉田屋（館岡氏）覚日記』（稿本）相馬市図書館所蔵 岩崎文庫

本稿執筆にあたっては、ご意向により氏名公表は控えさせていただきますが、本甲冑の所蔵者様には、当地方にとつて貴重な資料となる本甲冑をご貸与いただいたうえ、執筆のご快諾をいただきました。ここに厚く感謝申し上げます。

八木沢一氣様からは、本甲冑を最初に発見し、筆者にいち早くその情報をお知らせいただいたことをはじめ、古写真と本甲冑の兜の関連性を見出すなど、本稿の肝要となる部分についてご教示いただきました。そして、菅野茂雄様（^社日本甲冑武具研究保存会常務理事）、高橋一幸様（たかはし甲冑工房）からは、本甲冑の見識について貴重なご意見を頂戴いたしました。また、館岡敏美様からは、采配についての貴重な情報をお聞きしました。末筆ながら重ねて感謝申し上げます。

『瞽女口説地震の身の上』と福島県相双地方への瞽女の遊芸

二本松 文雄

はじめに

南相馬市博物館では、平成二十八

年（二〇一六）十月から翌年一月まで、常設展示室の一角にあるミニテーマコーナーで「盲目の旅芸人 睽女」という展示を行った。

展示資料は、市内で発見された『瞽女口説地震の身の上』という本の写し、瞽女を題材にした浮世絵の三代歌川豊国・初代歌川広重『双筆五十三次』三十一番 舞坂、歌川広重『東海道五拾三次』三十四番 二川 猿ヶ馬場、昭和五十一年（一九七六）に新潟県南魚沼郡大和町（現在の南魚沼市）穴地で撮影された瞽女の写真「南魚沼の台地を行く最後の長岡瞽女」、瞽女の旅に同行し、おもに高田瞽女を題材にした多くの作品を制作した斎藤真一の絵画「赤い陽の村」「鶯の口の雷」である。この展示から数年経過したが、今回



「盲目の旅芸人 睽女」展示風景

は『瞽女口説地震の身の上』の全文と、福島県浜通りの相双地方への瞽女の遊芸を紹介したい。

一、瞽女とは

少し長くなるが『日本民俗大辞典』を引用して要約してみたい。

瞽女は語り物や俗謡、はやり歌をうたつて渡世した盲目の女性である。遊行遍歴を旨とし、門付けを行い、大道や社寺門前で、あるいは家々に上がつて語り物や唄いものをうたつた。室町時代の『七十一番職人歌合』には琵琶法師とつがいになり『曾我物語』を語る、歩く遊行芸人として描かれている。当時は唄の芸能だけでなく、敵討ち話や戦語りを得意としたが、社寺の縁起や本尊の靈験譚も語った。近世にはいり、諸藩では身障者が芸で身を立て自活できるよう保護され、駿府、甲府、信州諏訪・飯田、越後高田、越中高岡などでは、城下町の町方に瞽女仲間の集団が形成された。やがて村里にも瞽女の組織化・集団化が行われた。越後の長岡瞽女は最盛期の明治中頃には約四百人に達した。瞽女唄の芸能伝承は徒弟のかたちで行われ、長い年期と厳しい生活規制があつた。

瞽女唄の本領は語り物の段物で、「葛の葉」「小栗判官」「山椒太夫」などの説教祭文を三味線の旋律にのせて哀調切々と語つた。ほかにも口説き、各地の民謡やはやり唄、独特の門付け唄、万歳その他の祝い唄がある。これらの唄を習得した瞽女は、季節を定め、手引きを先頭に師弟が連れだって村々を巡歴し、昼は門付け、夜は泊まり宿に人を集めて公



歌川広重『東海道五拾三次』三十四番 二川（愛知県豊橋市）猿ヶ馬場 保永堂版（天保4～5年：1833～34年出版 南相馬市博物館蔵）

瞽女は2～3人で連れ立って歩くのが普通で、3人の瞽女が寄り添って歩き、左右の2人は杖をついて歩くようすが描かれている。

瞽女が使う楽器はおもに三味線で、左と中央の瞽女は三味線を持っているが、右の瞽女が袋に入れているのは胴が丸く、首が太いことから、琵琶を背負っているようである。



三代歌川豈国・初代歌川広重『双筆五十三次』三十一番 舞坂（静岡県浜松市）（安政元～4年：1854～57出版 南相馬市博物館蔵）

3人の女性は目が不自由なようで、杖をついて歩いている。3人とも風呂敷を背負い、頭に手ぬぐいを被っている。左の女性は三味線をむき出して逆さまに持ち、棹の部分を肩にかけている。中央の女性は背中に黄色い布に包まれたものを持っているが、これも三味線と思われる。彼女たちは瞽女で2～3人単位で街道沿いの家々を訪ねては門付をして回った。瞽女は新潟の長岡瞽女・高田瞽女が有名だが、東海道沿いにも沼津や三島・駿府などに瞽女の組織があったといわれている。

演し、多くの娯楽を提供した。遠隔地まで足を延ばしたが、特に越後瞽女の活動は広範囲で、関東・東北から一部は北海道に渡った。瞽女は単に唄芸人としてだけでなく、その来訪は縁起が良いとして歓迎され、生業・産育・治病のうえで信仰的機能を強く期待され、瞽女には宗教性が色濃く残していることから、盲目巫女の流れをくむものと考えられる。^{*2}

二、瞽女口説地震の身の上とは

三条地震は、文政十一年（一八二八）十一月十二日朝八時ころ、信濃川流域の長岡・三条・燕付近で発生したマグニチュード六九の直下型地震である。震源は栄町芹山付近とされ、被害は信濃川に沿った長さ二五キロメートルに及ぶ精円型の地域で、三条・燕・見附・今町・与板などはほとんど全壊、死者一五〇〇人余、全半壊二万一〇〇〇軒余、火灾で焼失した家一二〇〇軒余という大きな地震であった。三条の被害が最も激甚であったことから「三条地震」と呼ばれ、江戸では地震を速報したかわら版が発行された。^{*3}

『瞽女口説地震の身の上』は、二条地震翌年の文政十二年（一八二九）に加茂矢立新田（現在の新潟県加茂市矢立新田）の斎藤真幸（七兵衛）が、祭文節（さいもんぶし）のような文体で刊行した本である。彼は神官で皇典漢学を学んだ国学者でもあり、兄の跡を継ぎ、幕府領であり伊勢国桑名藩預かり地の矢立新田の名主でもあった。^{*4}

祭文節は、本来は神への祈願文である祭文を、中世以降下層の山伏が芸能化し、錫杖や法螺貝などを伴奏楽器にして歌のよう語つたものである。のちには芸能化して専門の芸能者が担うようになり、歌祭文・祭文語りともいわれた。元禄年間（一七世紀末～一八世紀初め）には、三味線を伴奏に心中事件などを読み込んだ歌祭文の門付けが流行した。この本は各地に広まり、それを手書きした写本もあって、広く普及し

たようである。現在では、各地の図書館・博物館などに多くの刊本や写本が所蔵されている。

(一) 『瞽女口説地震の身の上』版木

斎藤真幸の著書『瞽女口説地震の身の上』の版木八枚と『野耄口説鄙里の腸』の版木七枚、計二冊分の版木が新潟県加茂市の真幸の後裔の家に残されており、加茂市指定有形文化財（歴史資料）となっている。両作とも両面彫り。作品は何度となく刷られたようで、版面には強い光沢がある。版は大きな文字で、六行の文書が彫られている。表紙右に「板元 きまや ひま右衛門」、中央に「瞽女口説地震の身の上」、左に「泣和津地声太夫」という号がある。^{*5}

(二) 『瞽女口説地震の身の上』（刊本と手書きの解説）

(国立国会図書館デジタル版)

本書は加茂市に残されてきた版木から新たに刷られた斎藤真幸著『瞽女口説地震の身の上』と、後半に読下し文および著者についての考察を加えたものである。文末に「大正十二年（一九二三）秋 関東地方大震災の後 養徳文庫主事 大橋栄三郎記す」というあとがきがある。養徳文庫は新潟県加茂市で郷土資料を研究していた大橋栄三郎が創設した私立図書館である。

その蔵書を国立国会図書館がデジタル化して公開している。それにようると、原本の著者は越後国蒲原郡加茂町字矢立新田の斎藤真幸、通称七兵衛である。真幸は安政六年（一八五九）六三歳で没するまで、『野耄口説鄙里の腸』（最初の著作と思われるが年代不明）、安政元年（一八五四）には『蒸氣船茶殻口説』を記したが、特に『瞽女口説地震の身の上』は最も人びとの人気が高く、遠く中国まで普及したとい

う。また、明治天皇もご覧になつたと伝わつている。^{*6}

(三) 『瞽女口説地震の身の上』（刊本）（早稲田大学所蔵本）

早稲田大学図書館サイトに全文が写真掲載されている。^{*7}表紙の右に「板元 きまや ひま右衛門」、中央に「瞽女口説地震の身の上」、左に「泣和津地声太夫」とある。書誌情報によれば、著者は斎藤真幸（サイトウ マサチ 一七九七～一八五九）、出版は文政十二年、出版地不明、出版者「きまや ひま右衛門」とある。また、本文の後に著作堂主人（曲亭馬琴）の識（見識）が朱書きされており、滝沢馬琴の旧蔵である。

(四) 『瞽女口説地震の身の上』（刊本）

(新潟大学附属図書館（佐野文庫）所蔵本)

本書は国文学研究資料館のサイト「国書データベース」に全文の写真が公開されている。^{*8}

(五) 『瞽女口説地震の身の上』（写本）（野寄久次氏所蔵本）

本書は瞽女唄ネットワークのサイトに全文の写真と読下し文が掲載されている。^{*9}

(六) 『瞽女口説地震の身の上』（写本）（林家所蔵本）

林家の祖先斎藤家は、元亀元年（一五七〇）から天正八年（一五八〇）にかけて真宗本願寺勢力と織田信長が争つた石山合戦で、本願寺の有力武将の一人であつたという。このため、親鸞上人直筆の「六字名号掛幅」と石山本願寺の櫓に安置されていた仏像を賜り、その後、浄土真宗移民として中村藩領内に移住の際、これらを持参したと伝わつて



『聲女口説地震の身の上』(写本) (林家所蔵本)

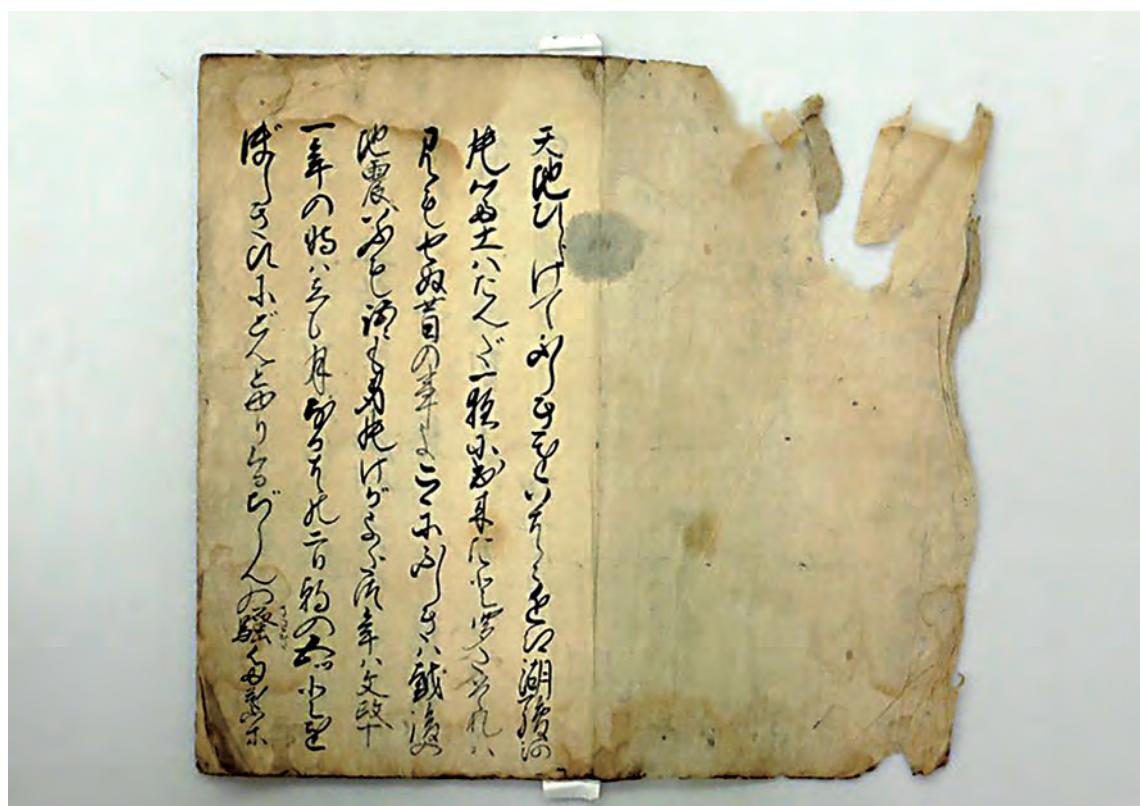
表紙

いる。林家では多くの古文書を有し、今回紹介する『聲女口説地震の身の上』もその一つである。以下、林家所蔵の『聲女口説地震の身の上』史料写真と、それに対応する読み下し文をページごとに掲載する。なお、読み下し文では当

用漢字や現代かなづかいを用い、適宜漢字に書き改め、送り仮名などを補足することにより読みやすくした。また、傍注による補足や用語解説も付した。

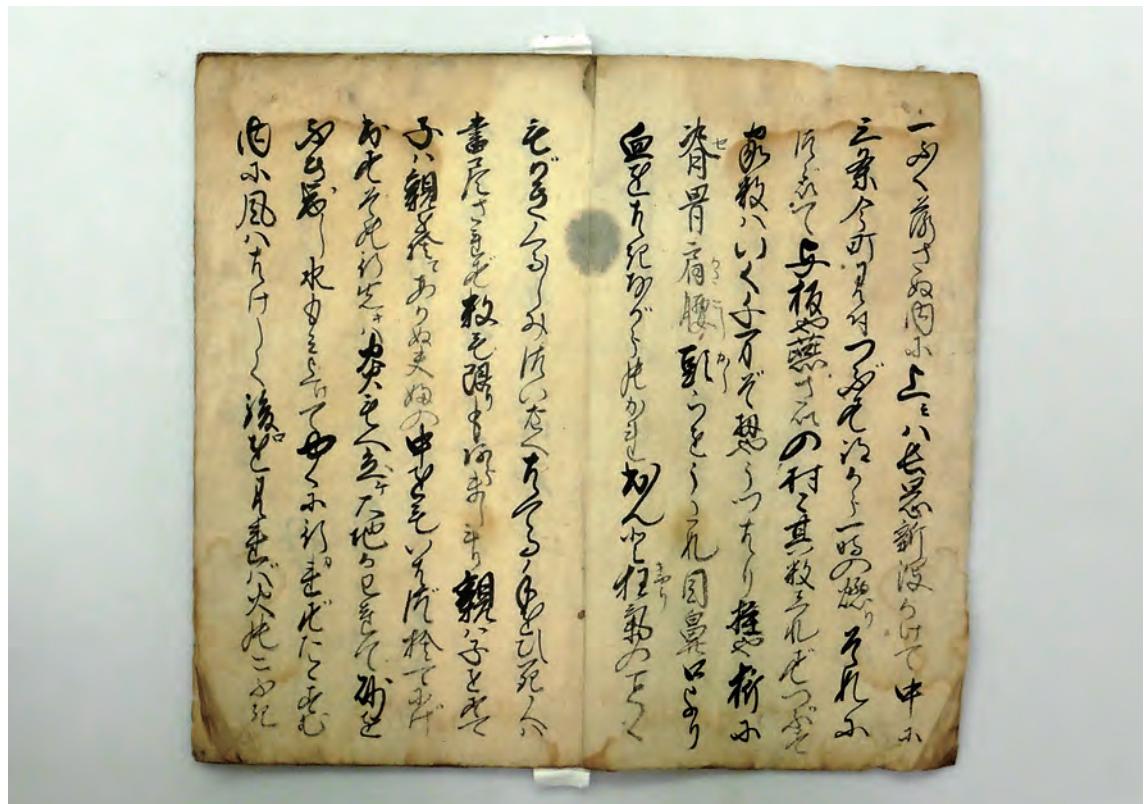
大字六行 きまま屋
ひま右衛門
聲女口説地震の身の上

泣和津地声太夫



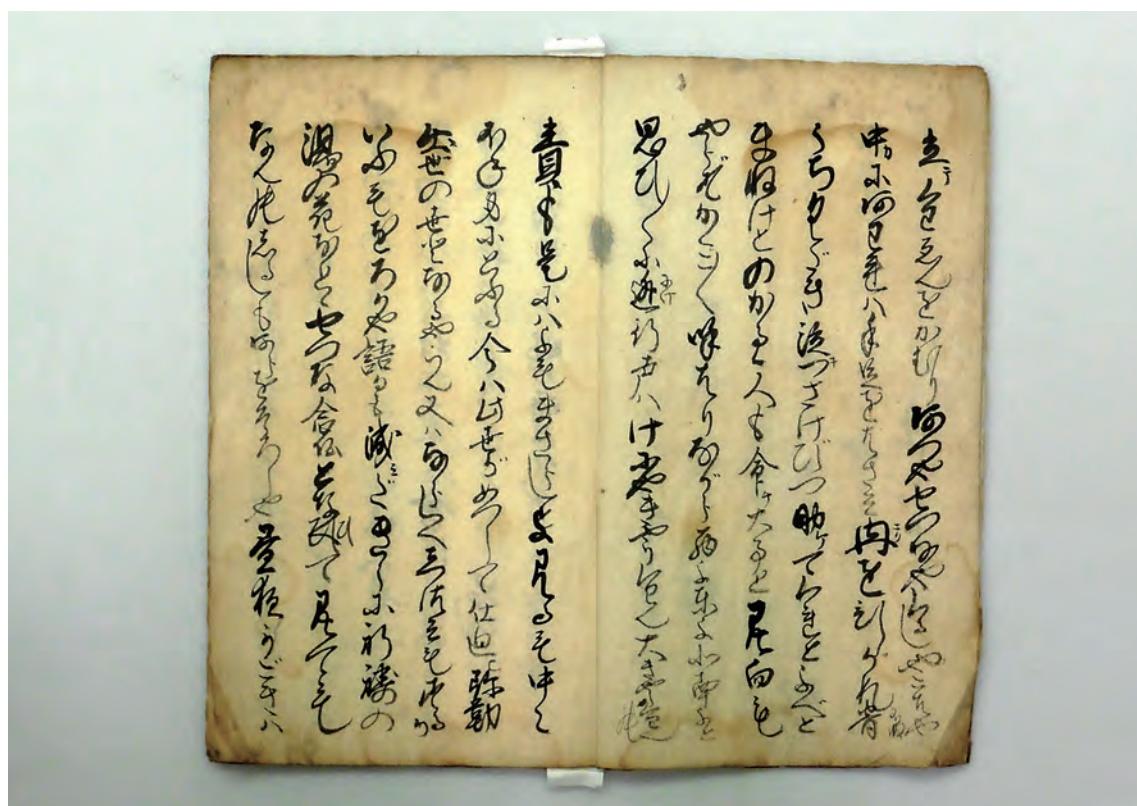
1ページ

天地ひらけて不思議をいわば近江湖駿河
の富士は（たつた）たんだ一夜に出来たと聞いたそれは
見もせぬ昔の事よここに不思議は越後の
地震言うも語るも身の毛がよだつ年は文政十
一年の時（ごろ）は冬月半の二日朝の五つとお
ぼしき頃にどんとゆり来る地震の騒煙草（さわぎ）



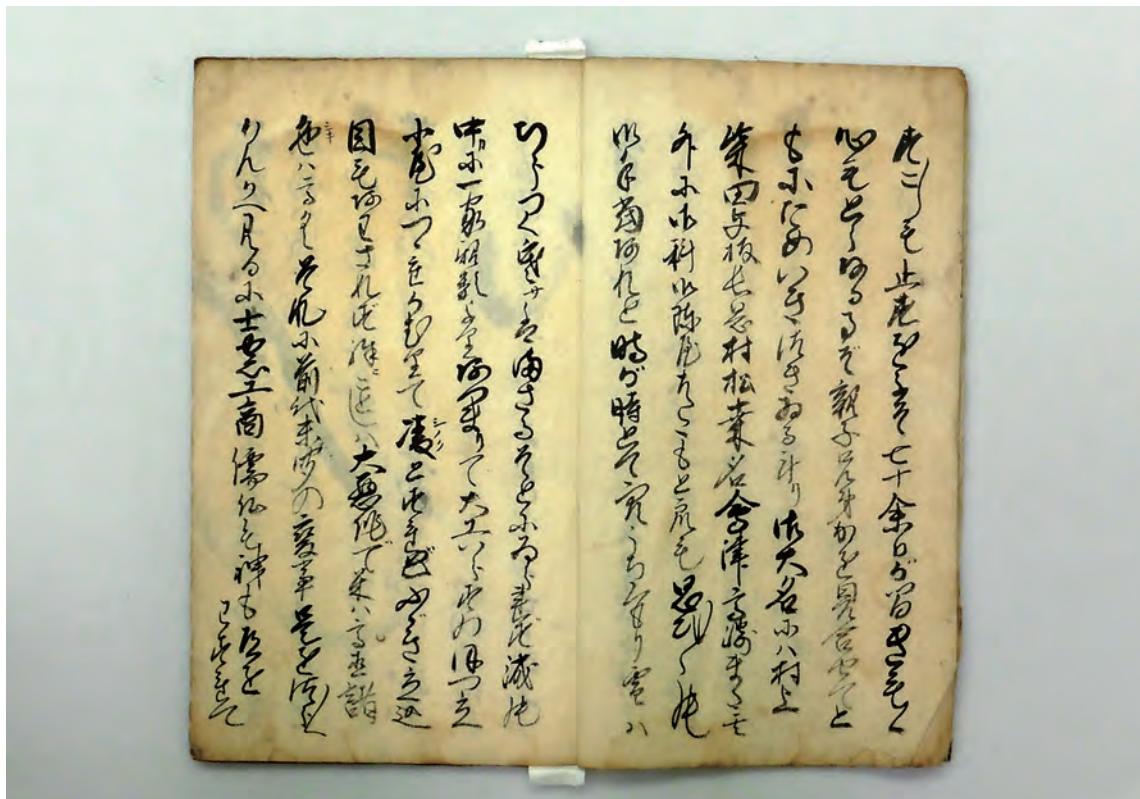
2ページ

一服落さぬ内に上ミは長岡、新潟かけて中に
 三条今町見付つぶす後から一時の燃りそれに
 続いて与板や燕在の村々その数知れず潰す
 家数は幾千万ぞさてやうつぱり柱や桁に
 背骨肩腰頭らを打たれ目鼻口より
 血を吐きながらのがれ出んと狂氣のごとく
 もがき苦しみつい絶え果てる手負い死人は
 書き尽くされず数も限りもあらましばかり親は子を捨て
 子は親を捨てあかぬ夫婦の中をも言わず捨て逃げ
 出すその行先キは炎燃え立ち大地が割れて砂を
 吹き出し水もみ上げて行くに行かれずたたずむ
 内に風は激しく後口を見れば火の粉吹き



4ページ

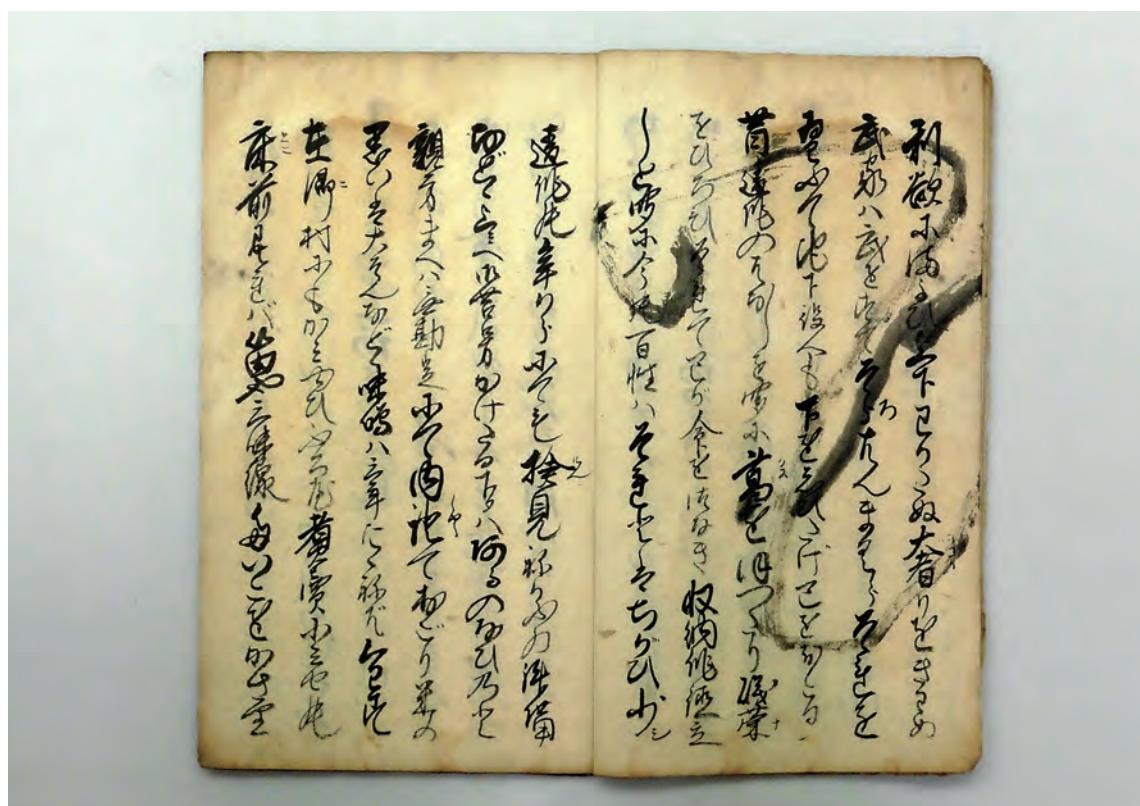
立てくわゑん（火焔）をかむりあつやせつなや苦しやこわや
中に哀れは手足を挟み肉ニクをひしがれ骨ほね
うち碎き泣きつ叫びつ助けてくれと呼べど
招けどのがる人も命大事と見向きも
やらず覚悟覚悟と呼ばりながら西よ東よ北南よと
思い思いに逃にげ行く声はげにや叫喚大叫喚の
責めもこれにはよもまさらじよ見るも中々
骨身にとおる今はこの世が滅してしまい弥勒
出世の世となるやらんまたは奈落へ沈みもするか
言うも愚かや語るも涙急に祈祷の
湯の花などと拙な念佛唱えてみても
なんの印もあら恐しや昼夜動きは



7ページ

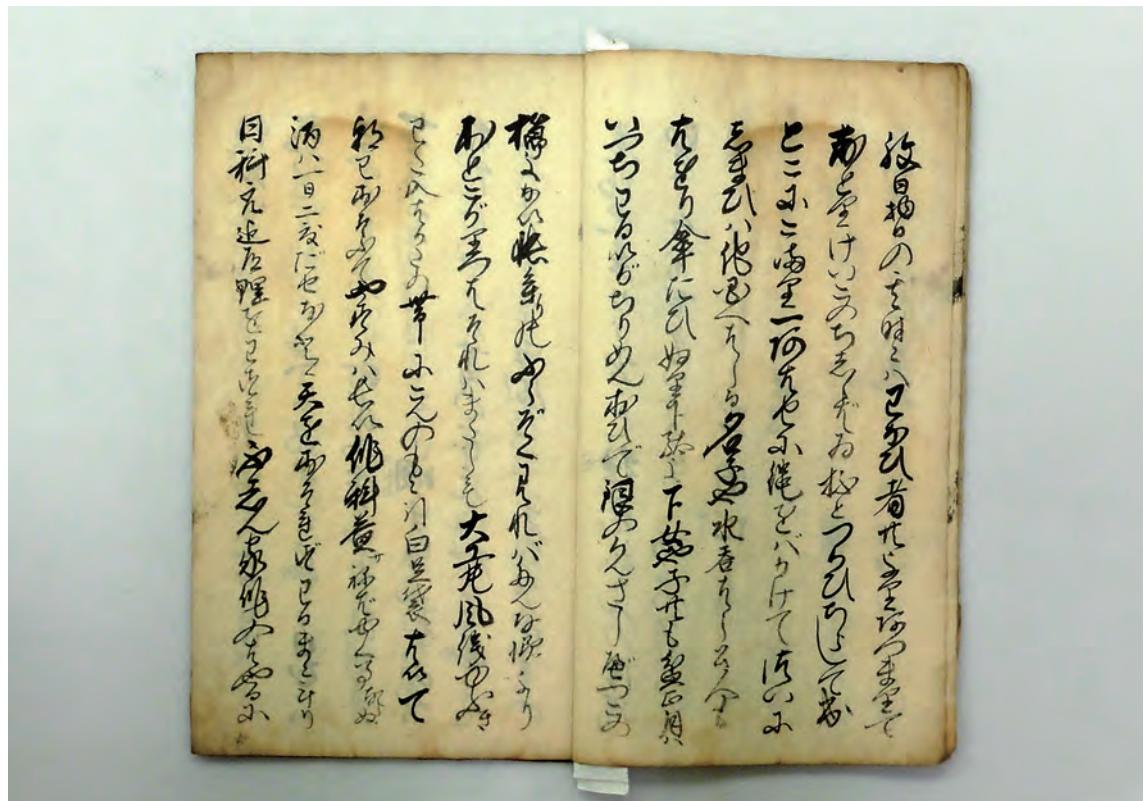
6ページ

少しあと止まらずおよそ七十余日が間肝も
 心もどうなる事ぞ親子兄弟顔見合させてと
 もにため息つき居るばかり御大名には村上
 柴田与板長岡村松桑名会津高崎まだその
 外に御料御陣屋旗本衆も思い思いの
 御手当あれど時が時とて空うち曇り雪は
 ちらつく寒さはまさる外に居られず涙の
 中に一家親類寄り集まりて大工いらずの掘つ立
 小屋につづれかむりて凌シノグとすれど吹雪立ち込み
 目も合わされず殊に今年は大悪作で米は高値諸
 色は高くそれに前代未聞の変事これをつらつら
 考えみるに士農工商儒仏も神も道を忘れて
 りんくるふ古事高傷ぬと神も道とて



8ページ

利欲に迷い上下別たぬ奢りをきわめ
武家は武を捨てそろばん枕それを
習うて地下役人も下をしいたげ己を奢る
昔違作の話を聞くに葛を掘つたり磯菜
を拾いそれで己が命をつなぎ収納作徳立て
しと聞くに今の百姓はそれとは違ひ少し
違作の年柄にても検見願うの拝借
などと上ミへ御苦労かけたる下タは有るのないのと
親方前は無勘定にて内証で奢り米の
黒いは大損などと味噌は三年たたねば食わず
在郷村にも髪結風呂屋煮売小店の
床前見れば笛や三味線太鼓を飾り



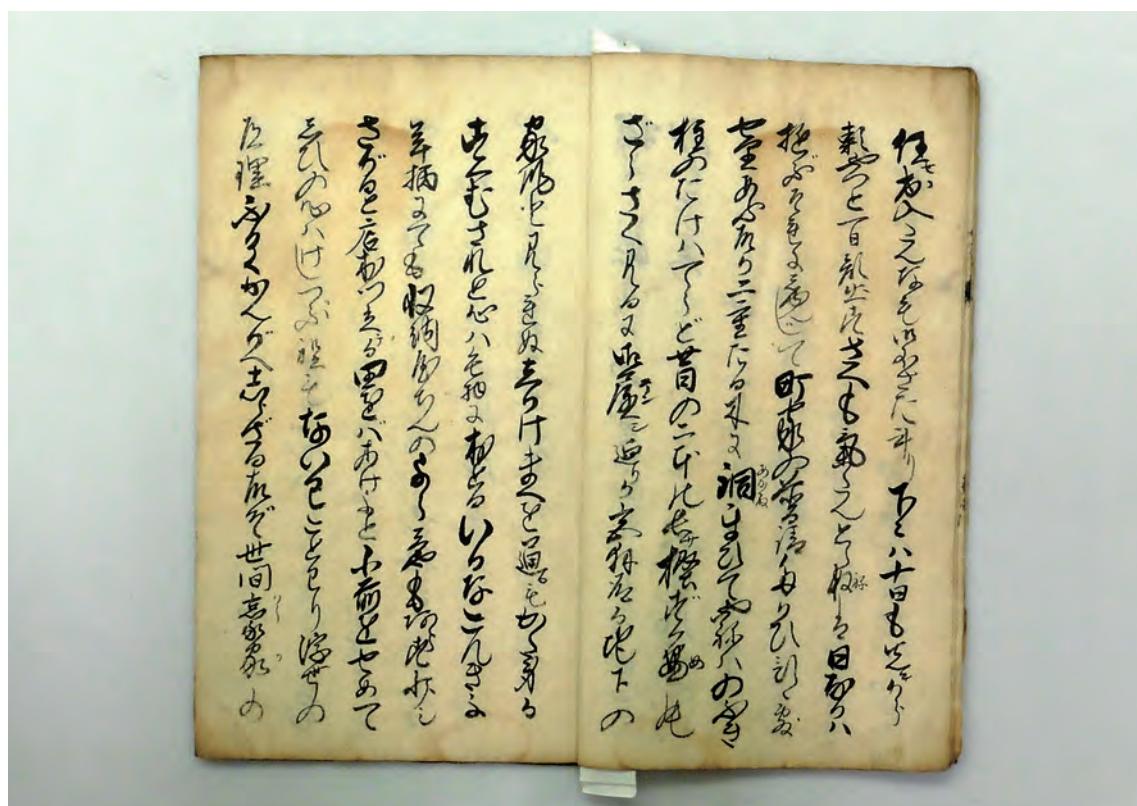
11 ページ

10 ページ

紋日物日のその時々は若い者共寄り集まりて
踊り稽古の地芝居などと使いちらして出
所に困り一つ袷に縄をばかけてついに
終いは他国へ走る名子や水呑奉公人も
羽織傘足袋塗下駄よ下女や子供も益正月は
いつち悪いが縮緬帶で銀のかんざし鼈甲の

櫛よ開帳参りの風俗見れば旦那様より

(お供
か)
おとこが立派それはまだしも大工の風儀結城
綿入れ博多の帶に紺のもも引き白足袋はいて
朝は遅うて休みは長い作料益さねば行く事ならぬ
酒は一日二度出せなどと天を恐れず我儘ばかり
日料取り迄道理を忘れ普請家作のはやるに

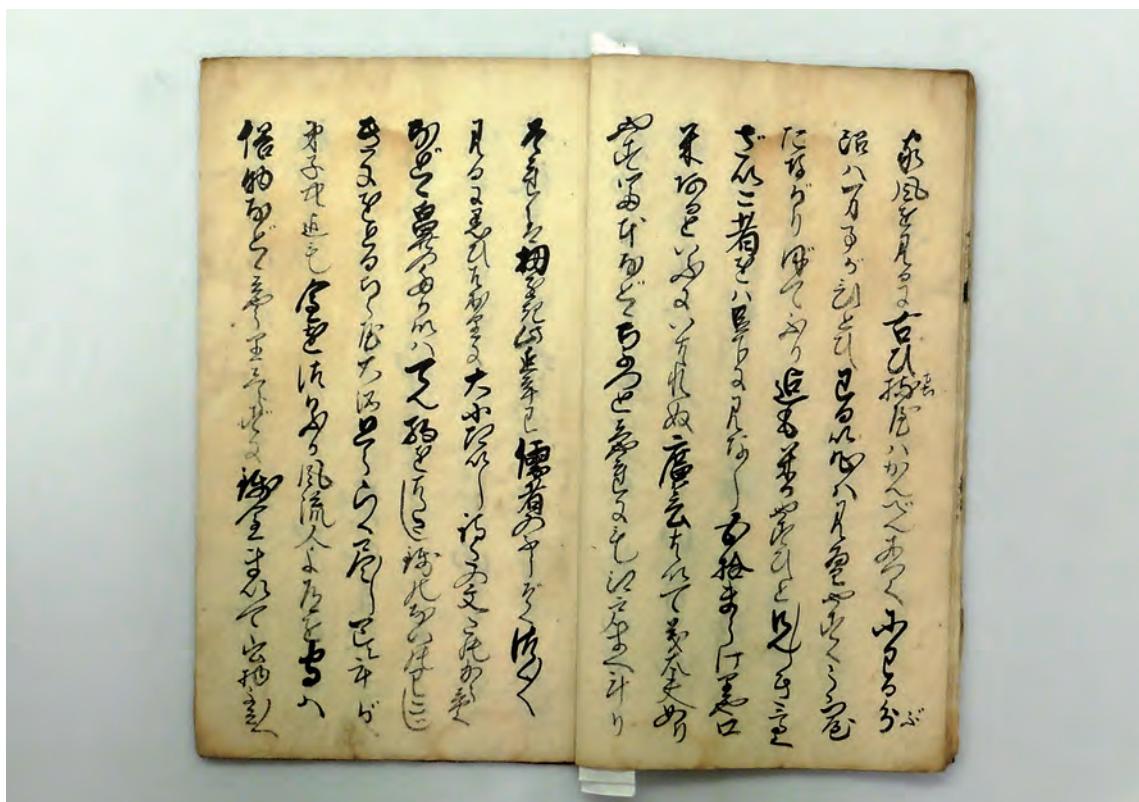


ねが入らぬをゆきたすりてとハ日もせう
れうと百般生れさせてもあくととねうと日ひ
れあきよの處にて町家の本屋もあらひとあ
室あらりニ重たる木ス洞あらわらまじて新あらわらのき
様あらわらにけてと首の二重化長櫻あらわらを揚あらわらせ
ざくさく月名又壁あらわらを巡あらわらて其の下の

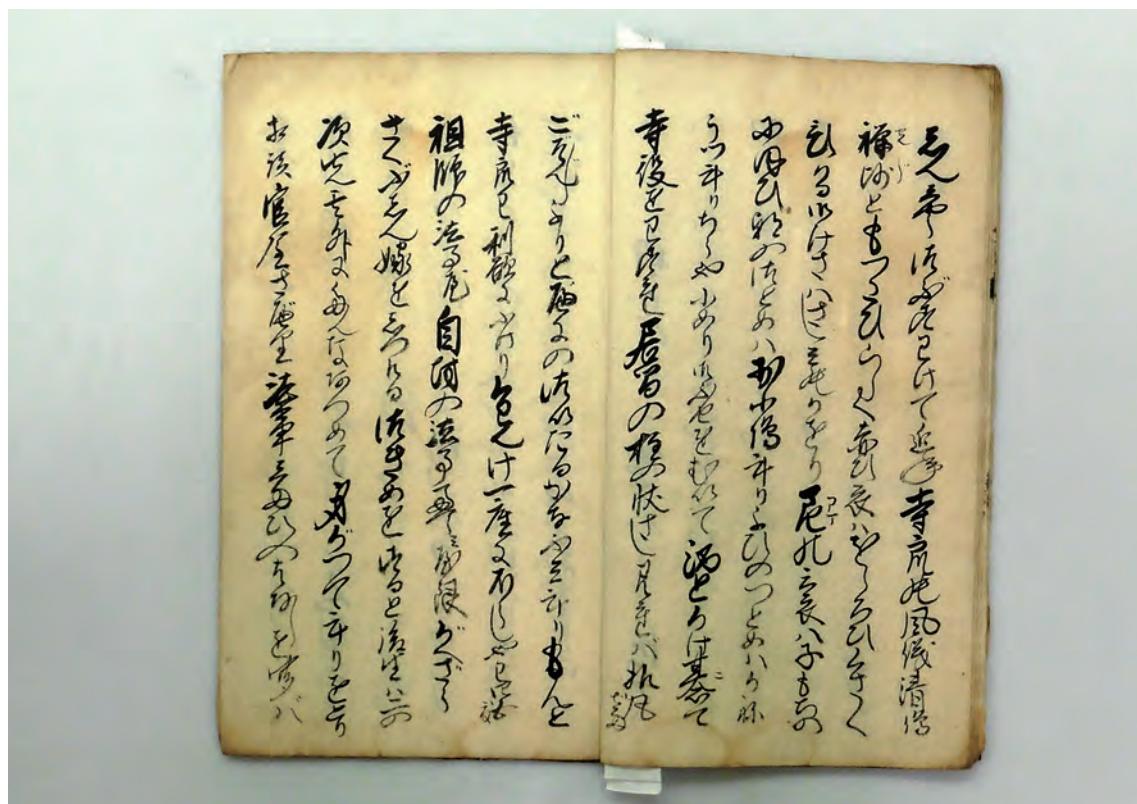
任せ出入り旦那も御無沙汰ばかり下々は十日も先から
頼むやつと一日顔出すさえも氣機嫌たん取らねば日なかは
遊ぶそれに準じて町家の普請互い美々しく
競り合う故か二重垂木に銅あかねまいて屋根はの葺あかね
柱の丈はちょうど昔の二本の長さ櫻あらわらずくめの
造作見るに御殿テンの廻りか宮拝殿か地下の

家作と見られぬ仕掛け前を通るも肩身くわいが
すくむされど心は毛物（獸）に劣るいかなこんきな
年柄（困窮）にても収納屋賃の容赦（困窮）もあらず少し
さがると店おつ立てる田をば上げよと小前を責めて
慈悲の心はけし粒程もないはことわり浮世の
道理深く考え知らざる故ぞ世間豪家（こうか）の

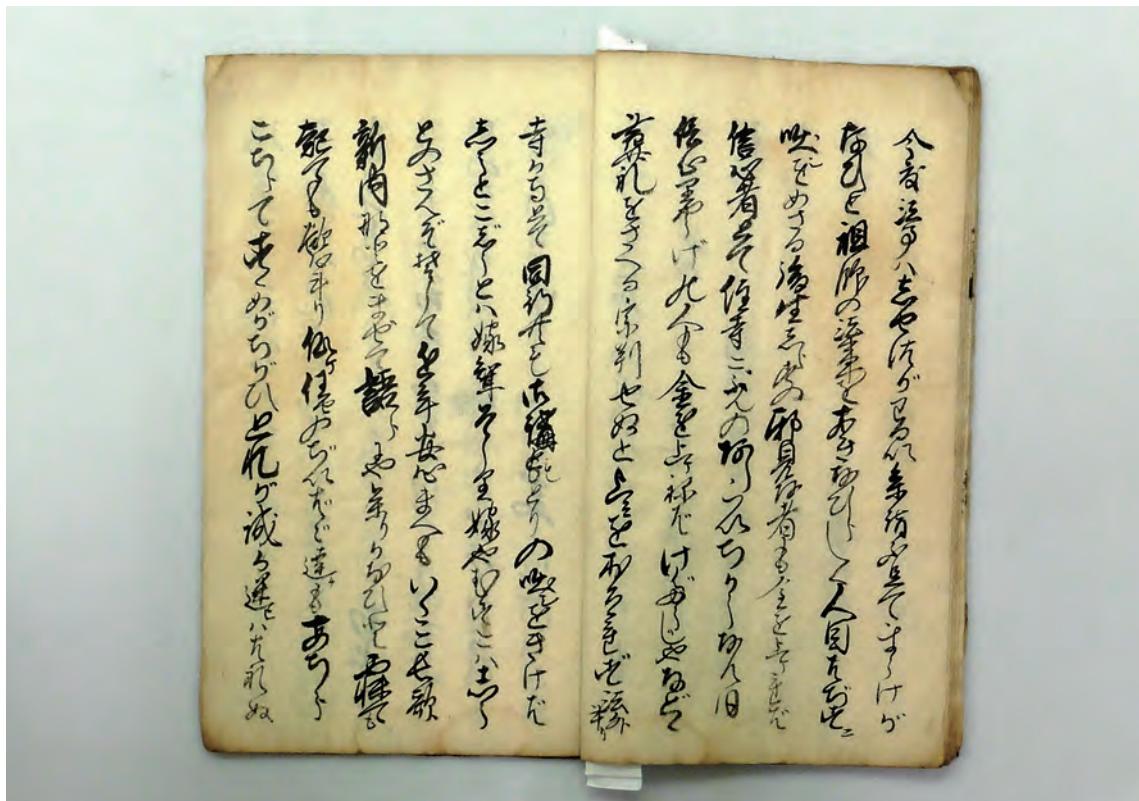
*ⁱ 日なか／半日のことか
*ⁱⁱ の葺／のし葺か。瓦屋根の棟などに熨斗瓦を多く積むほど重厚感が出る。



家風を見るに古い持屋は勘弁厚くにわか分
限は万事がひどい悪い心は見習いやすく裏屋
店借り棒手振り迄も米が安いと見識高く
在郷者をば足下に見なし五拾もうけりや口
米有ると言うにいわれぬ廣言吐いて義太夫めり
やす富本などとちょっと洒落にも江戸前ばかり
それはさて置きこの近年は儒者の風俗つくづく
見るに黒い羽織に大小帶し詩だの文だの講釈
などと鼻の高いは天狗をはだし錢のないのは乞
食に劣る昼夜大酒道樂尽し己ればかりが
弟子共迄も金を使うが風流人よ道を守るは
俗物などと冥利知らずに錢金まで書物読み読み



身上つぶすわけて近年寺衆の風儀清僧
 禅師ともつたいらしく赤い衣はおしろい臭く
 光る御袈裟は刺身の香り尼アマの三衣は子持ちの
 臭い朝の勤めは御小僧ばかり宵の勤めは鐘
 打つばかり昼夜めぐりか小めり御布施をむいて酒とかけ碁ごで
 寺役を忘れ居間の柱の状差見れば様丸さま
 御存知よりと紅のついたる仮名文ばかり門徒
 寺衆は利欲にふけり勸化一座に報謝は四、五度
 祖師の法事や自坊の法事畠屋根替え造
 作普請嫁を仕付ける続日をすると後生は二の
 次まずその外に旦那集めて身勝手ばかり奢り
 相談官勧金さべり法事しまいの話を聞けば



19ページ

18ページ

今度法事は時節が悪い参詣不足でもうけがないと祖師の法事を商いらしく人目恥ずに話をめさる後生知らずの邪見な者も金を上げれば信心者とて住寺こぶんのあしらい違うなんば
信心了解の人も金を上げねば外道じやなどと葬礼押える宗判せぬと上ミを恐れず法外ばかり

寺が寺とて同行共も御講戻りの話を聞けば

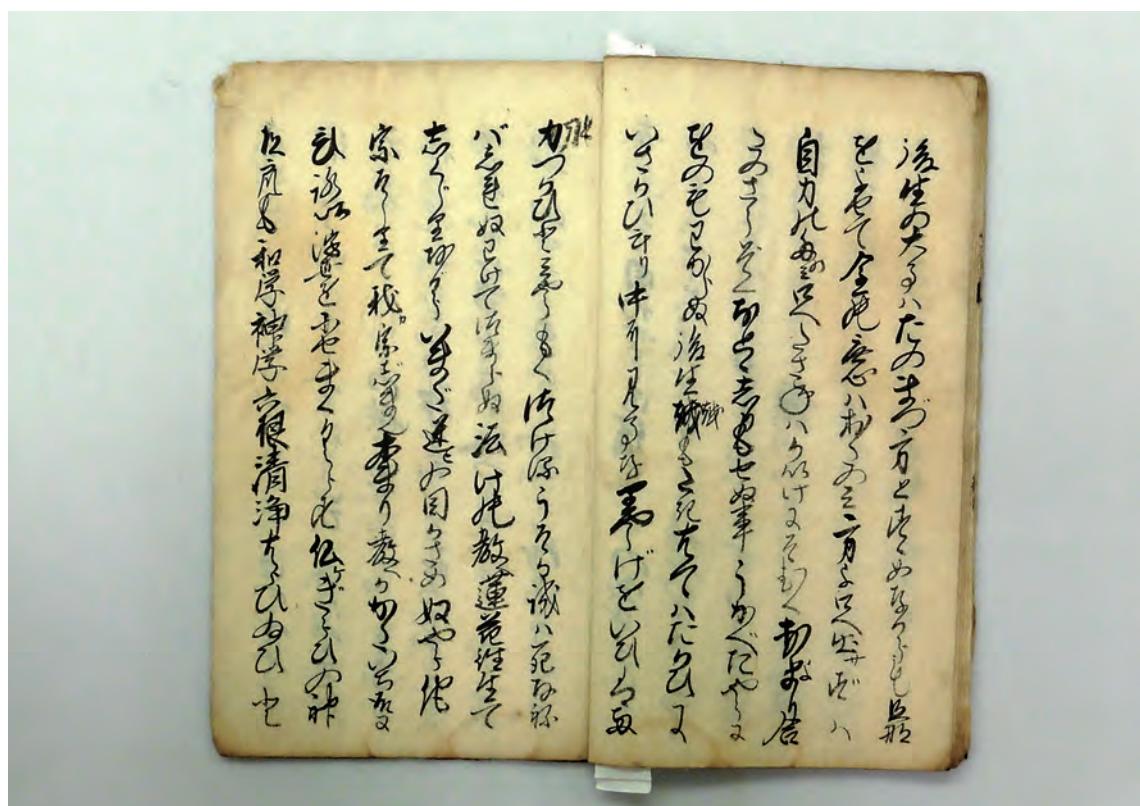
姑小姑は嫁聟そしり嫁や息子は姑

の讒訴^{*iii}そして近年安心前もいたこ長歌

新内などをまぜて語らにや参りがないと寝ても起きても欲心ばかり仏任せの爺婆達もあちらこちらで勧めが違いどれが誠か迷いは晴れぬ

寺うちも因わせし正徳^{正徳}の聲をすげだ
あとこどもと嫁聟そしり嫁や息子は姑
新内などをまぜて語らにや参りがないと寝ても
起きても欲心ばかり仏任せの爺婆達もあちら
こちらで勧めが違いどれが誠か迷いは晴れぬ

*iii
讒訴／かげぐちをいうこと



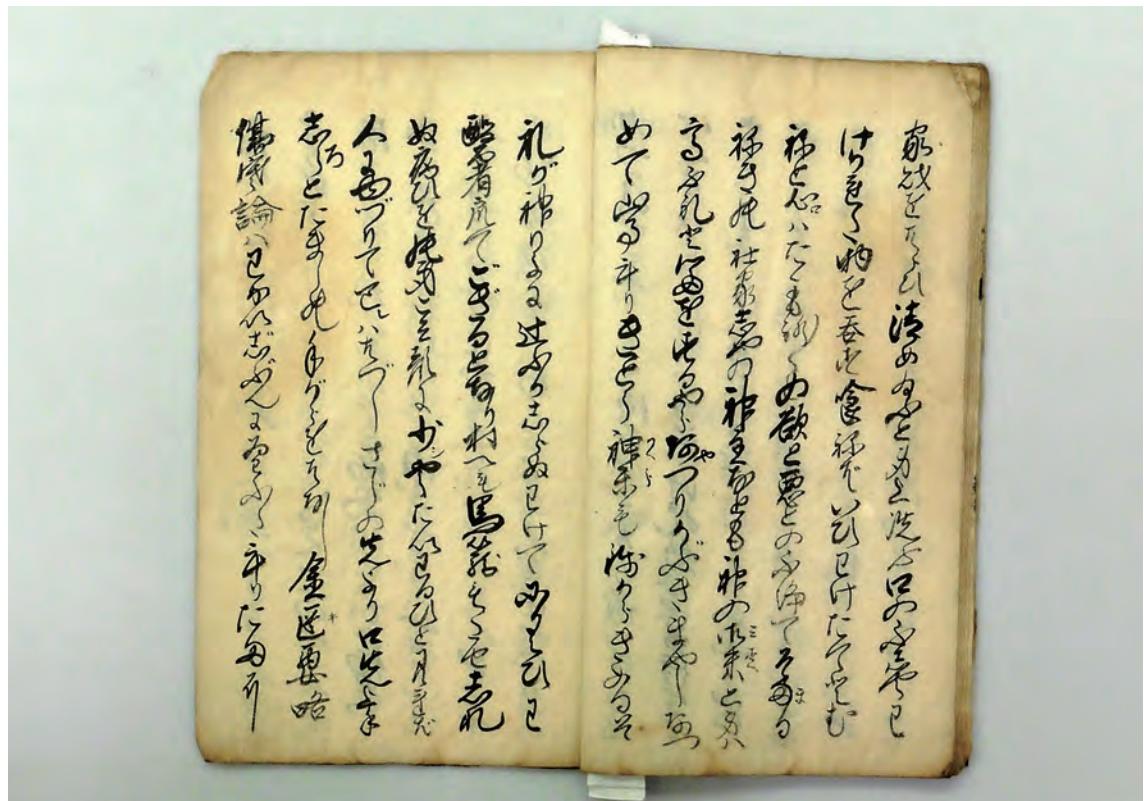
20 ページ

後生の大事は頼まず方と勧めながらも旦那
を寄せて金の無心はお頼み方よ口へ出さずは
自力の頼み口へ出さねば外家にそむくお寄合
いだの相続などと知りもせぬ事浮かべたよう
に己もわからぬ後生をもだき果ては互いに
いさかいばかり中に見事な領解を言えば両

^{*iv}

刀使いと名目付ける嘘か誠は死なね
ば知れぬわけてつまらぬ法華の教へ蓮華往生で
しくじりながらいまだ迷いの目が覚めぬやら他
宗そしりて我が宗自慢あまり教えが片意地故に
広い浮世を小狭く暮らす仏ぎらいの神
道衆も和学神学六根清浄払い給いと

* iv
* v
名目／領解／淨土真宗の教えの受け取り方
みよう／天台宗の五時八教、真言宗の十住心などの教え



23 ページ

22 ページ

家財を払ひ清め給うと身上洗う口の不淨は
穢れた物を呑まず食ねば言い訳たてど胸
と心口はただもろもろの欲と悪との不淨で染まる
神宜の社家じやの神主なども神の御末みすえと身は
高ぶれど富をするやらあやつり歌舞伎（末社カ）まやし集
めて山事ばかり祈祷神樂も錢から決めるそ

れが神慮に叶うか知らぬわけて憎いは

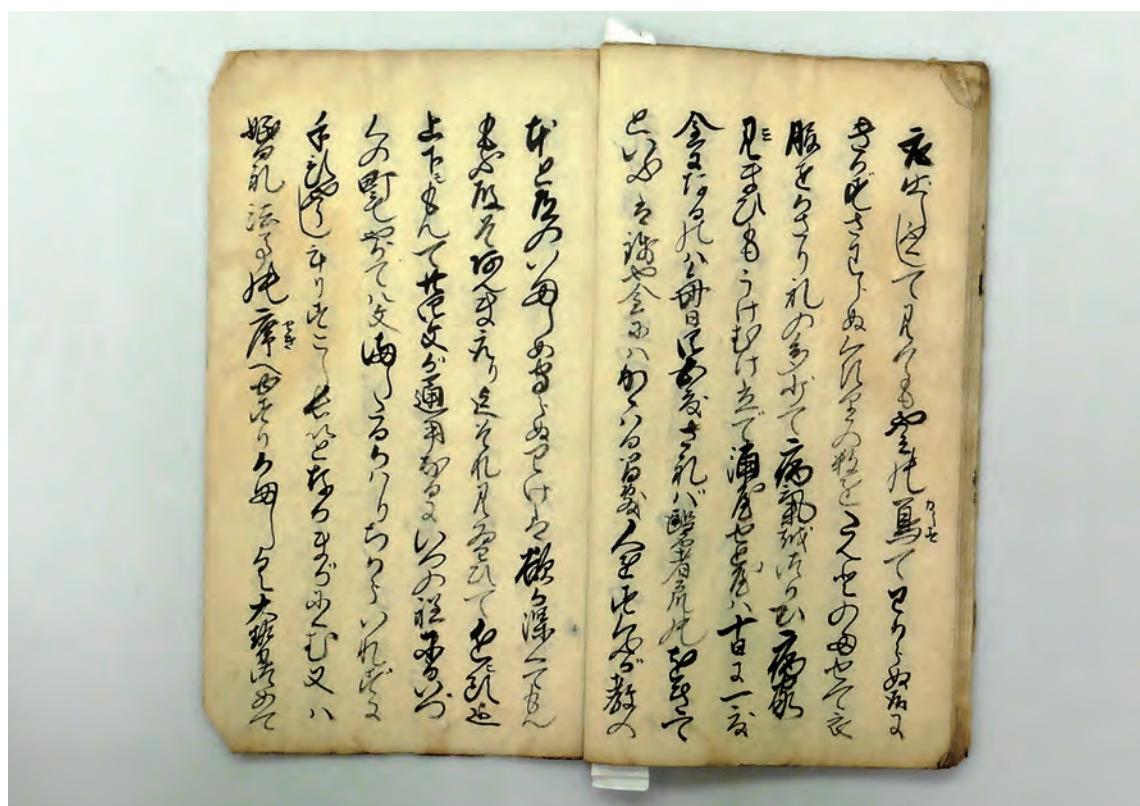
医者衆でござる隣村へも馬籠持たせ知れ

ぬ病いを飲み込み顔に少し容体悪いと見れば
人に譲りて己れは外しさじの先より口先上手

しろうとだましの手柄を話し金匱要略

傷寒論は若い時分に習うたばかりたまに

* vi 「金匱要略」『傷寒論』／中国の古典医学書。東洋医学薬物療法の古典



25ページ

24ページ

取り出し復して見ても闇の鳥からすでわからぬ故に効かず障らぬ薬の数をたんと呑せて衣

服を飾り礼の多少で病氣を使い病家

見舞も有卦*vii無卦立(裏屋カ(瀬戸屋カ)と屋は十日に一度

金になるのは毎日四、五度されば医者衆の掟

と言うは錢や金にはかかるまじく人を救うが教えの

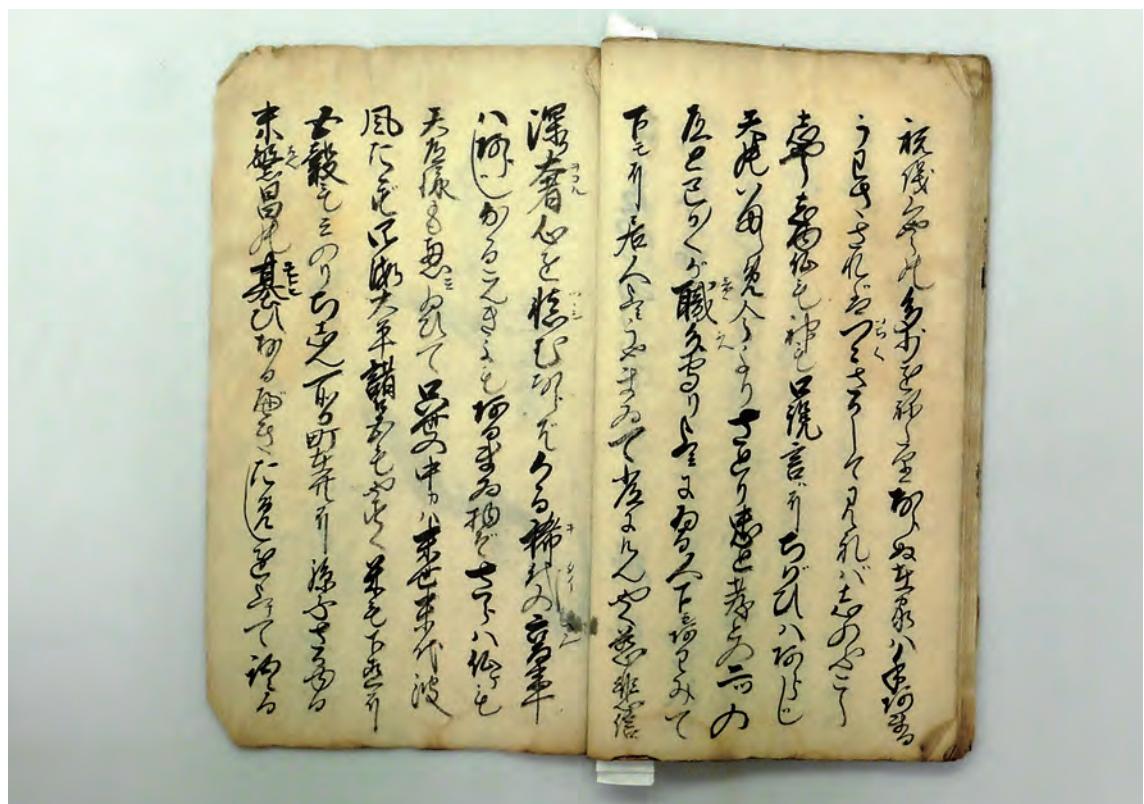
本と道のいましめ守らぬ訳は欲が深うて文

盲故ぞあんま取り迄それ見習いて近い頃迄

上下モもんで二十四文が通用なるにいつの程にかいづ
くの町もやがて八文増したるかわり力入れずに

手拍子ばかり少し長いと仲間が憎むまたは
婚礼法事の席せきへゆすりがましく大勢つめて

*vii 有卦無卦うけむけ／陰陽道でいう幸運と不運の年回り



27 ページ

26 ページ

祝儀供養の多少をねだりならぬ在家は手余る
うわさされば一々探して見れば士農工
商儒仏も神も口説言葉に違いはあらじ
天の戒め今より悟り忠と孝との二つの
道を己か己が職分守り上ミニ居る人下モ(あわれみてか)
下モに居る人上ミニ敬いて常に儉約慈悲信

深く奢心を慎むならばかかる希代の変事
はあらじかかる困窮もあるまい物ぞさらば仏ケも
天道様も恵ミたいてただ世の中は末世末代波
風立たず四海大平諸色も安く米も下値に
五穀も実り地震どころか町在共に孫子榮ゆき
末繁昌の基なるべきためしを上げて語る



29ページ

28ページ

この身も罪深きやら地震潰れの掘立小屋に
しばし籠りて世の人々の穴と癖とを書き記
し置く筆の命毛おそろしや

天保四歳

之写書

氣儘屋
暇右衛門作

巳 正月二十日

須崎 ■ 列重

斎藤真幸の思想と号について

『瞽女口説地震の身の上』刊本には、「板元 きままやひま右衛門」「泣和津地声太夫」の二つの名前がある。一方、長岡市立中央図書館反町文庫の『瞽女口説地震の身の上』には、北越三嶋（現在の長岡市・三島郡出雲崎町ほか）住「苦楽斎感山一徳」という署名があり、『越路町史』（現

在の長岡市越路町）では、作者は確かにことはわからぬとしている。^{*10}

その後発行された『加茂市史』では、「泣和津地声太夫」は斎藤真幸の戯号^{*11}としている。○○太夫という号は、この口説きの語り手という設定である。また、版本や版本に彫師の名はなく、製版地も明らかではないが、版本が加茂市の斎藤家に伝来していることから、真幸が直にかかわって出版したものと考えられている。したがって「板元 きままやひま右衛門」も真幸の戯号と考えられる。写本である林家本の表紙には、（板元の文字はなく）「きまま屋 ひま右衛門」「瞽女口説地震の身の上」「泣和津地声太夫」と書かれている。刊本にはない奥書には、「気儘屋暇右衛門作」とある。刊本の「気ままや ひま右衛門」も、林家本の「きまま屋 ひま右衛門」「氣儘屋 暇右衛門作」も「泣和津地声太夫」も真幸の戯号であろう。なお、真幸が著した『野耄口説田鄙の腸』では「不^{*13}清本伊弥太夫」という戯号を用いている。

斎藤真幸がいくつもの戯号を使い分けたのは、彼の遊び心だけでなく、自身が庄屋（肝煎）の立場にありながら、著述内容が地震の被災状況にとどまらず、社会風潮や儒者・僧侶・医者・神官などの教化階級を批判・風刺していることから、本名を明かさなかつたのではないだろうか。

諸産業が発達し、貨幣経済が広がつて、一九世紀初めには化政文化がさかんになつた。そのため、身分や秩序が流動化し、豊かになる庶民が現れると、時代背景を考えると、『瞽女口説地震の身の上』は、庄屋や名主といった從来からの重立^{おもだつ}は既得権が脅かされ、天変地異や社会不

安と結びつけて自己の利益を守ろうとしているようにも読み取れる。この本に流れる思想は、盛んに消費し、豊かになろうとする新興層を快く思つていな重立による風刺の書物とも感じられる。^{*15}

『瞽女口説地震の身の上』は瞽女唄だったのか

瞽女には唄を暗唱することが要求されるが、長編の段物や口説きなどの暗唱は並大抵ではない。そのため、歌詞を書いたものがあつて、稽古の知己や記憶を取り戻すために、少しでも目の見える瞽女や手引き（瞽女の道案内人）、家族などの晴眼者から読んでもらつていた。これを稽古の座右に置いたり、巡業時に携帯する瞽女も少なくなかつた。^{*16}

『瞽女口説地震の身の上』の写本が、新潟県南魚沼市千石の瞽女宿をしてきた家に所蔵されてきたこともあり、従来、『瞽女口説地震の身の上』は瞽女などが三味線に合せてうたつた口説き歌であるとされてきた。^{*17}^{*18}

しかし、越後瞽女の生存者から確認できた瞽女唄の曲目は、祭文松坂（段物）・口説き・常盤津・清元・長唄・端唄・京唄・義太夫・門付け唄・祝い唄・ざか唄（民謡・はやり唄）である。口説き唄には安五郎口説きのように入名を付したもの、赤猫口説きのように動物名を付したものなどがあるが、そのなかに瞽女口説きは確認されていない（ざか唄に「瞽女松坂」という曲名はある）。^{*19}

はたして『瞽女口説地震の身の上』は瞽女唄だったのであろうか。これについて最新の知見では、「瞽女^{こぜ}（門付して巡業する盲目の旅芸人）^{*20}が三味線に合せて唄う口説き唄になぞらえ」著したという見解が示されている。

林家について

林家本の奥書には斎藤真幸の戯号「氣儘屋 暇右衛門作」の上から左

にかけて「^(一八三三)天保四年^{之写書} 己 正月廿日 須崎^{列重}」とある。「須崎^{列重}」は書き写した人物の居所と名前と考えられる。須崎の下の塗りつぶされた部分は不明である。須崎は林家の出身地加賀藩領石川郡須崎村である。須崎から中村藩領行方郡押釜村に移住した後の林家は、斎藤実望の子斎藤実重を祖とし、中村藩領移住後に林姓を名乗り、初代は林甚右衛門（一七八一～一八五〇）である。

年代を整理すると、文化十年（一八一三）に林家の祖先が現在の南相馬市に移住し、一五年後の文政十一年（一八二八）に三条地震が起り、六年後の文政十二年（一八二九）に『瞽女口説地震の身の上』が刊行され、二〇年後の天保四年（一八三三）に書き写され、その後、林家に伝わったことになる。

江戸時代には藩を越えて移住することはご法度で、真宗移民の多くは移住元との関係が秘匿にされてきたこともあり、現在では林家のルーツにあたる須崎の斎藤家は特定されていない。^(つらしげか)列重と林家の関係は不明だが、「須崎列重」が林家の祖先斎藤家であれば、移住後も両家の付き合いがあつてこの写本が伝わったことも考えられる。

三、福島県相双地方への瞽女の遊芸

福島県相双地方の市町村史の民俗編などを見ても、瞽女に関する説明は非常に少なく、あつても一～二行の短い概説程度である。瞽女は東北地方では新潟方面から訪れるため、会津地方は比較的近しいが、太平洋側の浜通りでは瞽女の遊芸はほとんど知られていない。

現代では忘れ去れようとしている相双地方での瞽女の遊芸を文献と書き書きから紹介したい。

『福島県史^{*21}』

「ごぜなどという、めくら法師なども語つて歩いたし、特に宿泊まで

しなくとも、舞い込みのように、各戸をたずねて、語り歩いたさいもん語りの類もあった。

『新地町史^{*22}』

瞽女など門付け芸人が来ることもあった。これらの人たちは、金や米などをもらいながら、一軒一軒回つて歩き、泊まる場合は大体定宿というものがあった。

なお、口絵に明治十一年の瞽女という説明の写真がある。一人の女性が三味線とは違う丸胴の弦楽器（中国・東南アジアの民族楽器月琴か）を奏でて歌い、一人の少女がササラのようなものを持つている。二人がかぶっている編み笠も新潟方面の瞽女の編み笠とは違い、中国・東南アジア風である。瞽女というには疑問が残る。

『鹿島町史^{*23}』

芸能関係者では大正時代には猿回しやゴゼが時々回ってきた。ゴゼは二人位の女性で三味線を弾く。ゴゼは鹿島に泊まつたものであつた。

『太田村史^{*24}』

瞽女（ごぜ）多くは女で盲又は眇^{すがめ}のもので三味線を弾いて人の門に立ち歌ふて錢を受けた地方では（ごぜのぼう）と言つた。

『原町市史^{*25}』

瞽女（ごぜ）鶴谷では、昭和まで瞽女が来ていた。瞽女は二、四人の組になり、村の決まつた家に呼ばれて村の人たちに三味線を弾いて聴かせ、お礼に米をもらつた。

押釜のH家は北陸から相馬地方に入植した浄土真宗移民の草分けの家の一軒である。同家に瞽女が来ていたかどうかは確認できないが、江戸時代の瞽女に関する文書が残されている。北陸の人たちが見知らぬ土地にやってきて、頼りにしたのは、かつて北陸から浄土

真宗移民としてやってきた同郷の者の家であつたかもしれない。

遊芸人達であつた。

(旧)
『浪江町史』^{*26}

(ごぜ) 三味線を弾き唄をうたつて門付けをして物を乞う盲目の女集。これは鳥追いの進化したもので、鳥追いははじめ農家の年中行事の一つ、正月十五日に田畠に害をする鳥や獸などを追う歌をうたい村々の若者たちが拍子木などを鳴らして家々を門付したのが始まり、それが後に非人の女太夫が編み笠をかぶり、唄をうたつて門

付けをし金銭を貰つて歩く職業へと化した。ごぜはそれのまた変つたもので、多くは盲目又は目の不自由な女で、一人廻りのものもあつたが、二、三人組み合つて門づけをした。うたう唄も語り物となり、「白石敵討ち」とか「葛の葉子別れ」など歌舞伎の世話物を三味線に合せてうたつた。

ごぜもまた泊りづけの家があり、そこに泊つて一晩続き物などをうたつた。聞きに集まつた人々は一銭、二銭の喜捨をして涙を流した。

『浪江町史』^{*27}
『富岡町史』^{*28}

ゴゼ やはり冬になると一人でやつて来て、民家に泊まり、その家に人を集めで三味線を弾きながら唄を聴かせたという。

行商のほかに遊芸人が、祭文語り、会津万才、神樂ぶち盲のゴゼなどの旅芸人や門付け芸人も、昔は季節ごとに村から村を渡り歩いていたものであった。頭に小旗の付いた半切タライを載せていた飴屋や、紙芝居屋は子供達に喜ばれた人達であった。

『広野町史』

盲の女人の人で、唄を歌い踊つて幾らかのお金を貰いながら旅をしていたゴゼや、虚無僧、猿回し、お札売りなども町を通つて行つた

瞽女唄ネットワーク会長の鈴木昭英氏のご教示によれば、長岡から相馬・仙台を経て、秋田へ旅した瞽女たちもいて、非常に歓待され、通婚した例もいくつもある。養蚕地域では「瞽女が来ると蚕が太る」といわれて歓迎された。福島県浜通り地方では大正時代頃までは瞽女が来ていたという。

南相馬市原町区の岩橋光喜氏（昭和十九年生）は、幼児の頃（昭和二十二年頃）、現在の南相馬市原町区大原の母の実家で、祖母に抱かれて瞽女さんの唄と三味線を聞いたという。その頃はテレビもラジオもなく、山村を訪れた旅芸人の芸能が珍しかったという。

これらの例からすると、相双地方での瞽女の遊芸はおもに大正から昭和初期まで続き、まれに昭和二十二年頃にもあつたといえる。

おわりに

『瞽女口説地震の身の上』は大正十二年（一九二三）の関東大震災後に養徳文庫から解説書が出ている。^{*30}

翌、大正十三年（一九二四）には『歴史地理』第四十三卷第二号の隨筆日録（鹿鳴）に『瞽女口説地震の身の上』が養徳文庫で版本から新たに刷られたことが紹介され、

安政見聞誌と云ひ、此の文政の地震口説と云ひ、過去に同じことが屢々繰り返されて、同じことが親切に戒められてあるに拘らず、世人は疾くに其の痛さを忘れてしまつて、いつまでも同じ災禍に苦しんで居るのだ。歴史を無視する国民は危い哉と叫ばねばならぬ。^{*31}

と忠告している。

しかし、悲劇はまたも繰り返され、平成二十三年（二〇一一）に東日

本大震災が起り、福島県浜通り地方では地震・津波・原発事故・風評被害に見舞われている。今回、『瞽女口説地震の身の上』をあらためて紹介する」と、今後の災害への教訓となることを願いたい。

最後に、今回紹介した『瞽女口説地震の身の上』写本の所有者林英一郎氏・林眞一郎氏、多くの御教示をいただいた鈴木昭英氏ならびに元福島県立博物館学芸員の佐々木長生氏、元新潟県立歴史博物館学芸員の板橋春夫氏、加茂市民俗資料館学芸員の中澤資裕氏に深く感謝申し上げます。

【註】

- 1 瞽女唄ネットワーク会長鈴木昭英氏提供。瞽女唄ネットワークは、瞽女の歴史や歩みを後世に伝えようと平成三年四月に設立された団体で、おもに長岡瞽女や三条瞽女の活動を記録・研究し、瞽女唄の普及や地域文化の啓蒙活動を展開している。
- 2 『日本民俗大辞典』上 吉川弘文館（一九九九）P626
- 3 板垣俊一「文政十一年三条地震の記録」『新潟の生活文化』新潟県生活文化研究会（一〇〇五）
- 4 地震史料集テキストデータベース『燕市史』通史編 燕市（一九九三）
<https://materials.utkozisin.org/articles/detail?id=J2700113>（令和五年十一月閲覧）
- 5 加茂市『加茂市史』資料編六 文化財（一〇一〇）
- 6 『瞽女口説地震の身の上』を大正十二年（一九二三）に大橋栄三郎が解説を加えて再発行したものが、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる。著作権未確認のため、インターネット公開はされていない。
- 7 早稲田大学図書館『瞽女口説地震の身の上』（早稲田大学所蔵本）
https://archive.wul.waseda.ac.jp/koshio/i04/i04_00600/i04_00600_0169/i04_00600_0169.html（令和五年十一月閲覧）
- 8 国文学研究資料館「国書データベース」『瞽女口説地震の身の上』（新潟大学附属図書館（佐野文庫）所蔵本）
<https://kokusho.nii.ac.jp/biblio/189560?ln=ja>（令和五年十一月閲覧）

9 瞽女唄ネットワーク『瞽女口説地震の身の上』（野寄久次氏所蔵本）
<https://goze.folklures.net/goze/nozaki/jisin/jisin01.html>（令和五年十一月閲覧）

10 越路町『越路町史』通史編 上巻（一〇〇一）P549

11 加茂市『加茂市史』資料編六 文化財（一〇一〇）P193

12 加茂市民俗資料館 中澤資裕氏の教示による。

13 加茂市『加茂市史』資料編六 文化財（一〇一〇）P193

14 加茂市『加茂市史』通史編 上巻（一〇一〇一）P663～664および中澤資裕氏

15 地震史料集テキストデータベース『燕市史』通史編 燕市（一九九三）
<https://materials.utkozisin.org/articles/detail?id=J2700113>（令和五年十一月閲覧）

16 17 鈴木昭英「瞽女の歌本」『長岡郷土史』第十一号 長岡郷土史研究会（一九七二）

18 加茂市『加茂市史』資料編二 近世（一〇〇八）P406

19 20 鈴木昭英「越後瞽女の世界」にいがたの門付け芸を活かした地域活性化事業 第一回講演会資料 新潟県立歴史館（一〇一六）

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 福島県『福島県史』第二三巻 各論編九 民俗一（一九六四）P103～104
新地町教育委員会『新地町史』自然・民俗編（一九九三）口絵写真・P176
福島県鹿島町『鹿島町史』第六巻 民俗編（一〇〇三）P355
太田村史実研究会『太田村史』（村長岡田庄次郎在任期間（一九三一～四〇）に発刊）P276
太田村は現在の南相馬市原町区太田。

20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 南相馬市『原町市史』第九巻 特別編II 民俗（一〇〇六）P284
福島県双葉郡浪江町『浪江町史』別巻II 浪江町の民俗（一〇〇八）P178
福島県双葉郡浪江町『浪江町史』（一九七四）P611
福島県富岡町『富岡町史』第三巻 考古・民俗編（一九八七）P663
広野町『広野町史』民俗・自然編（一九九一）P414
「国立国会図書館デジタルコレクション」『瞽女口説地震の身の上』再発行
大橋栄三郎（一九二三）

- 31 「瞽女口説地震の身の上」文政十一年越後大地震の記』『歴史地理』第
四十三卷二号 随筆日録（鹿鳴） 日本歴史地理学会編纂 日本学術普及会
（一九二四）
- 【参考文献等】
- （株）二玄社『謎解き浮世絵叢書 三代豊国・初代広重 双筆五十三次』（一九〇一）
- ギヤラリー朱雀院『斎藤真一 越後瞽女日記 作品集』
- 斎藤真幸『瞽女口説地震の身の上』出版者 大橋栄三郎（一九一三）
- 南相馬市『原町市史』第一卷 通史編I 「原始・古代・中世・近世」（一九〇一七）
- 南相馬市『原町市史』第五卷 資料編III 「近世」（一九〇〇七）
- 『角川日本地名大辞典』一七 石川県 角川書店（一九八二）
- 『日本歴史地名体系』第一七巻 石川県の地名 平凡社（一九九一）
- 大和田幾雄『蓮如上人直筆六字號御掛軸 檻の本尊 伏見義助殉職の頃の時代
相』『歴史・史跡探訪シリーズ』一四 原町市歴史民俗資料室（一九九三）
- 五来重『民間芸能の諸相』『民間芸能史』五来重著作集 第七巻 (株)法藏館
（一九九八）
- 鈴木昭英『瞽女の歌本』『長岡郷土史』第十一号 長岡郷土史研究会（一九七二）
- 鈴木昭英『瞽女のわざと力』『フォーカロア』第三号 特集 女の力 木阿弥書
店（一九九四）
- 鈴木昭英『越後瞽女ものがたり』岩田書院（一九〇〇九）
- 鈴木昭英『越後瞽女の世界』『新潟県立歴史博物館 にいがたの門付芸を活かし
た地域活性化事業 第一回講演会資料』新潟県立歴史博物館（一九一六）
- 鈴木昭英『越後瞽女の旅』『新潟県立歴史博物館 にいがたの門付芸を活かした
地域活性化事業 第三回講演会資料』新潟県立歴史博物館（一九一六）
- 鈴木昭英『瞽女 芸道の軌跡』瞽女文化を顕彰する会（一〇一八）
- 葛谷鮎彦『高山瞽女と越後瞽女』（三）『飛驒春秋』通巻第一〇二号 飛驒郷土
学会（一九七四）
- 葛谷鮎彦『高山瞽女と越後瞽女』（四）『飛驒春秋』通巻第一〇二号 飛驒郷土
学会（一九七四）
- 葛谷鮎彦『高山瞽女と越後瞽女』（八）『飛驒春秋』通巻第一〇六号 飛驒郷土
学会古谷綱武『越後こぜと民間信仰』『新潟日報』新潟遠望（一九七五年十一月
三日付）

佐久間惇一「越後の瞽女」『講座日本の民俗』九 口承文芸 有精堂出版
（一九七八）

坂本要「祭文と祓い 睽女と盲僧の伝承を中心として」『仏教民俗学体系』八
（一九九二）

板垣俊一「文政十一年三条地震の記録」『新潟の生活文化』新潟県生活文化研究
会（一九〇〇五）

板橋春夫「瞽女の旅路」『地方史研究』三八二号 地方史研究協議会編 岩田書
院（一九〇一六）

渡部等「只見瞽女夜話」『只見とつておきの話』II 福島県只見町（一〇二一〇）

南相馬市博物館研究紀要 第14号

令和6年（2024）3月31日発行

編集・発行 南相馬市博物館

〒975-0051

福島県南相馬市原町区牛来字出口194番地

TEL：0244-23-6421

FAX：0244-24-6933

<https://www.city.minamisoma.lg.jp>

E-mail：hakubutsukan@city.minamisoma.lg.jp

印刷・製本 (有)ライト印刷

〒975-0073

福島県南相馬市原町区北新田字信田370-1

TEL：0244-22-6891

FAX：0244-22-6804